

ブラジル移民の研究

—移民家族がたどった「史的モノグラフ」からの考察—

Research on Japanese Who Immigrated to Brazil:
An Historical Monograph of Japanese Immigrant Families

池田 碩*

Hiroshi IKEDA

〔I〕はじめに

1908（明治41）年4月神戸港から「笠戸丸」でブラジルへと781人が集団移住して昨年は100年を迎えた。このため、送付側の神戸市では笠戸丸が出港した4月に、受け入れ側ではブラジルのサントスへ入港し集結したサンパウロ市を中心として6月に、記念式典が挙行された。筆者も両国での式典に出席した。ブラジルへは約24万人が渡ったがその子孫である日系人が約150万人、すでに5～6世に達しており、ブラジルは最大の日系人居住国となっている。ところで、筆者がなぜこのような行事に出席し、さらにこの論文を書くことにしたのかをまず述べておく。

筆者の家系や親族、さらに郷里（福岡県久留米市（旧三井郡））の身近な地域から当時の社会情勢に合わせて、中国・満州・朝鮮などのアジア大陸や北米や南米大陸へと多数移住している。実は、筆者自身もその1人である。私は、アジア系移住家族であったため、第2次大戦終了後の引揚者である。

一方、北米・南米に渡った家族のうちには、一部は開戦直前に引き揚げた者もあるが、残留し移民として定着し、現在ではそれぞれの国の国民として活躍している家族も多い。

筆者は、現在地理学を専門とする研究者の立場となり、その間の留学もUSAの大学で体験したこともあるのでUSAの家族や親しい移民達については、彼等が出稼ぎからスタートし移民に至り、さらにその後の展開や現状について「家族史・ファミリーヒストリ」を中心に取り上げ、学会で報告し論文としてもまとめた。しかし、南米への移民についてはまだ論じていない。

ところが、2006年に大学生30名を引率しブラジル各地を訪問する機会を得た。その折のメインテーマに日系人が最も多い国であり、現在は日本への出稼ぎ者が最多の国となっているブラジルについて考えてみることにした。このため、各地での案内者にはできるだけ、移民となられた方にお話し、それぞれのまさに生の体験談を聞かせてもらいつつ各地では関連施設も訪問した。

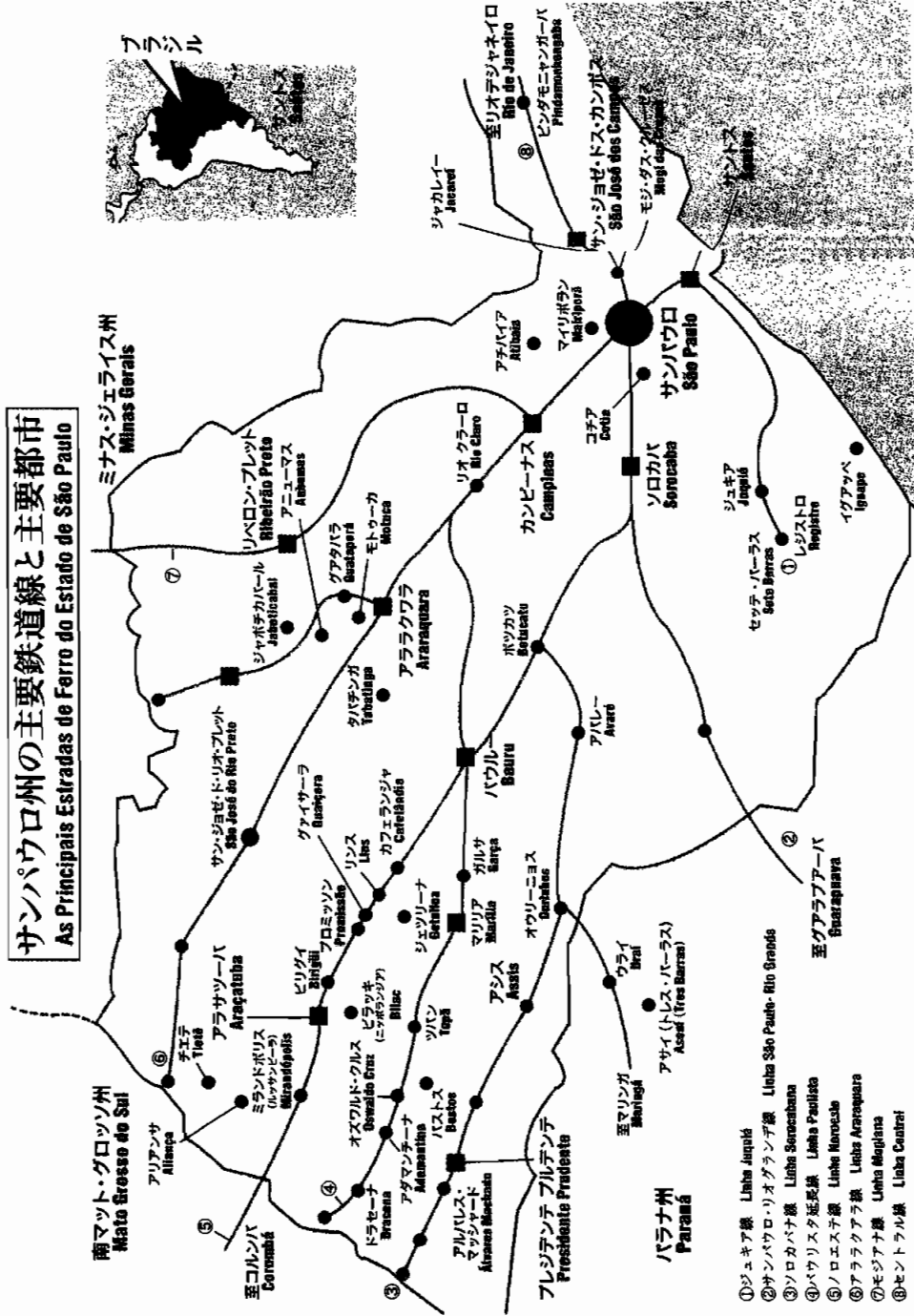


図-1 ブラジルと移民関係地域図
Fig. 1 Brazil and Map of Cities and Towns where Emigrants Live

さらに、昨2008年には移民100周年記念式典に出席してきた。

そこでこれを機に、これまで筆者が家族同様に付き合わせてもらい、お世話になっている人達のうちから、特に筆者の専門や思考を理解していただき、かなり無理なお願いにも応答してもらえる家族すなわち植木家・井上家・森村家に、すでにそれぞれの「家族史」を書いてもらっている。このうち井上家の場合はすでに「戦前ブラジル開拓移民団としての24年間の足跡」として書かれているものに修正・加筆していただき使用させてもらった。そこで、今回は当然ながら、その大変貴重な「体験」を中心にして、筆者が整理まとめつつ報告することで責任を果す順番と考え、本論を記すことにした次第である。

書いてもらった「家族史」は各人各家の個性を生かすため若干の調整は行わせてもらったが、書き方や表現の仕方に違いが出ていてもそれ自体が大変興味深いところであり、できるだけ原文を生かさせてもらった。

それぞれの家庭には、移住の年代や、その後の展開も異なるが、現在も元気で活躍しておられることが良くわかる。もし可能であれば、この報告を元にさらなる立派な家族史的モノグラフを書いてもらえる機会としてもらえれば幸である。

今回本論に登場してもらおう家族について紹介しておく。

- 井上克（91才）氏と長男（64才）氏の家族は、岡山県南部の瀬戸内海に臨む漁村から昭和7（1932）年に克氏13才の時、小学校を中退し、姉夫妻の家族構成員としてブラジルへ、ジャングルの開墾と綿作農家としてスタート。苦節8年でやっと借金を返し生活も安定する。日系二世のモモ子さんと結婚後、ハツカ農家として自立するが失敗。その間に実氏が誕生。農業をあきらめ、雑貨商を開店、これが軌道に乗り成功。

子供5人となり、教育のことを考えた末、昭和31（1956）年に日本へ帰国。戦後は「勝ち組」の仲間、精神的には帰国時までそのトラウマは抜けなかった。

高度成長期の日本へ帰国後は、建売住宅業から再スタートし建築業も兼ね成功。実氏も大学卒業後は、家業を継ぎ現在に至る。91才の克氏には子供5人と孫12人があり、移住センター近くの神戸市で健在。克氏にはいつでも会ってもらえ、実氏とは大学も同窓で年齢も近いので懇意にしている。

- 森村吉蔵（76才）氏は、青森市出身で昭和8（1933）年生。昭和27（1952）年、日本大学法学部を卒業と同時に23才でブラジルへ。農業出身でもないのに大学卒の農業移民として、仲間とバナナ栽培とジャングルの開墾からスタート。電気も水道も無い生活が続く。同船時の友人から手紙を受け、たまたまこの地から逃げだし、日系人仲間の学校の職員になる。そこからは、高校時代広島国体の県代表として出場したテニスの経験を生かし、子供達や地域の人達に溶け込む。その後サラリーマンへ。二世の孝子さん（昭和14年生）と結婚後、さらに伯国へ進出してきた三井物産に転職、会社の出張で日本へ、さらに郷里も訪ねる。この頃が昼夜を問わず働いたが、当時が絶頂期だった。奥さんは画家で、日曜学校の指導も行なう。

2006年の学生巡検の現地案内者として、2008年の移民100周年記念式典時にもお世話になり、家庭を訪問させてもらった。

- 植木栄壮（46才）氏とミエ（43才）さんの家族。栄壮氏は、筆者の務める奈良大学の地理学

科出身。1987年には筆者が引率した海外巡検に参加。その後、勤めていた教科書会社を退職され国際協力機構の海外開発青年隊に参加、ブラジルで3年間を過ごす。この間、日系四世に当るミエさんと結婚。その後、日本の郷里広島市へ帰国し現勤務の会社へ再就職されている。ミエさんの祖・祖父母は、大正2(1913)年熊本県玉名郡から初期の移民としてブラジルへ。父方は、戦後の初期移民として昭和30年(1955)年、ブラジル日系農業組合の招聘に応じて熊本市から渡航。現在広島で夫妻は、二人の子育てにも手がかからなくなってきたのを機に、両国のためにと、まずはミエさんが県の国際センターの「外国人総合相談窓口」で翻訳や通訳などの仕事をしておられる。

- 上野米蔵(故人)・長男アントニオ(87才)氏の家族は、筆者の隣村である福岡県三井郡草野村の農家出身。米蔵氏は大正2(1913)年に18才で、すでに先行していた従兄の福太郎氏をたよりブラジルへ向う。最初はサンパウロ州のヴィラコスチーナのコーヒー園へ、その後は従兄の福太郎氏が働いているパラナ州のバルボーザのコーヒー園へ移り成功する。しかし、将来を考え、カンパラKampara市へ出て28才で雑貨店経営と農産物の仲買業でも成功。30才で北パラナ州の日本人会会長となる。アサイAsai市で綿花株式会社も設立。1973年78才で死亡。

長男のアントニオ氏は、1992年生で、北パラサ州青年連盟会長を経て、アサイ市議、パラナ州議、連邦下院議員(1967～98)、現在パラナ日伯商工会議所会頭。サンパウロ市の「日系パレスホテル」社長も兼ね、健在。

筆者は2008年6月同ホテルに宿泊した折、話をうかがえ「父・上野米蔵伝」と「母のおもかげ」をもらった。その後郷里の草野町を訪ね、親族の方にあい話をうかがった。アントニオ氏自身の経緯に関しては現在本人で整理されつつあるとのこと。筆者が接した期間も短いため、今回は深く取り上げてはいないことを記しておきたい。

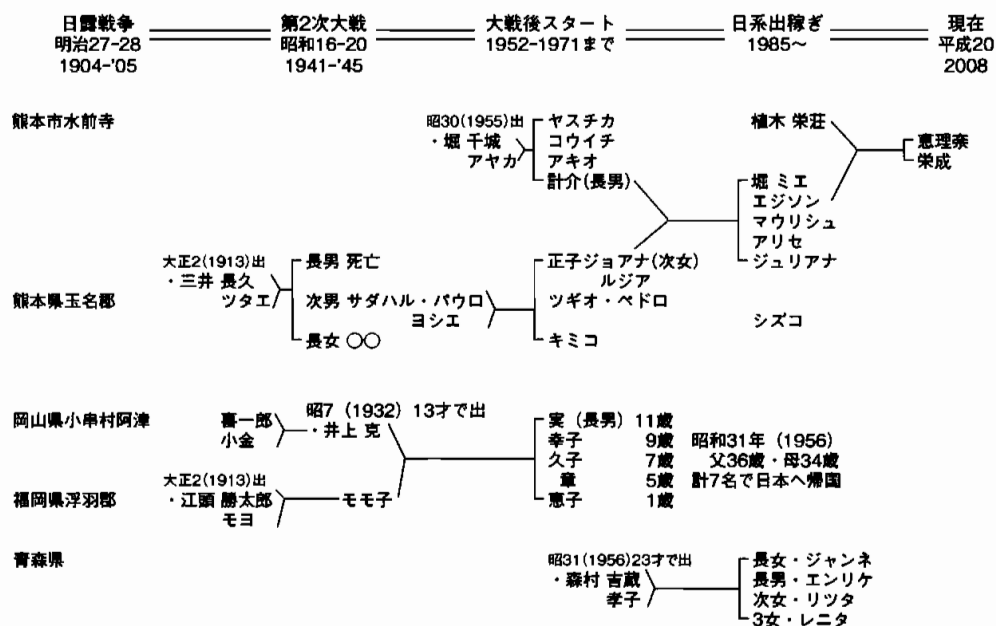


図-2 関係者の系図 Fig.-2 Lineage Diagram

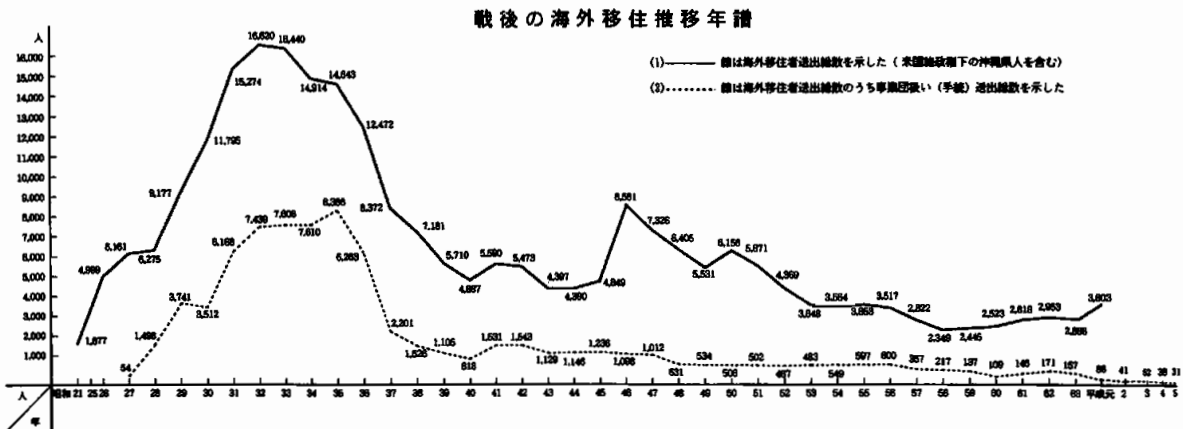
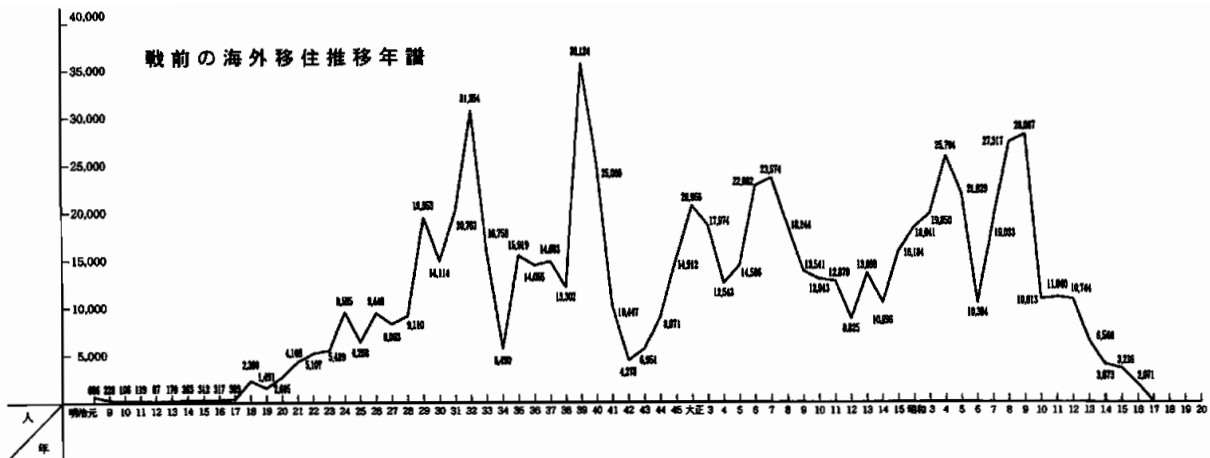


図-3 海外移住統計 (国際協力事業団 1994)

Fig.-3 Statistics of Emigrants History

〔Ⅱ〕家族史-A 植木栄壮・ミエ家

「日本からブラジルへ、ブラジルから日本へ」(植木栄壮46歳・ミエ43歳)

(1) はじめに

2008年、ブラジル日系社会では、移民100年目として一つの節目を迎えました。1908年に第1回農業契約移民781人を乗せた「笠戸丸」がサントスへ入港して以来、現在では1世から5世・6世までを含め、150万人以上が日系社会を作り、ブラジルの各層に深く入り込んでブラジル国の発展に大きく貢献しています。

さて私・栄壮ですが、現在の国際協力機構（JICA）が募集する日系社会青年ボランティアで、1994年から97年までの3年間、ブラジルのサンパウロ州で活動していました。1970年代にコチア青年で移住した方の農家でバラ作りをサポートした後、日本語教育機関「日本語普及センター」（現・ブラジル日本語センター）で日本語教科書の作成やシンポジウムの開催に関与しました。そのため、日系社会の現状や日系移民史、日本語教育の問題点などに触れることができました。さらに、妻のミエが日系4世ということから、身内のこととしてブラジル日系人のことを知る機会もありました。

日系社会の移民史をひも解く際、第二次世界大戦の前後（戦前と戦後）で大きく分けられます。戦前移民と戦後移民とは、移住した動機や境遇、ブラジル社会への溶け込み方などが大きく異なるため、さらに世界的な情報通信網の発達や、ブラジル社会の中での日系子弟の活躍とも関係してきます。ただどの移住者にとっても、世界経済や政治の中で翻弄され続け、決して平坦ではありませんでした。

妻・ミエの実家は、母方の三井家が戦前移民で、1回目の笠戸丸から数えて5年後と早い時期での移住でした。一方、父方の堀家は戦後移民で、戦後の移民がスタートして2年目という時期でした。それぞれの家族がたどった人生を検証することで、当時の日系社会がうきほりとなり、さらに現在の日本人が忘れていている日本人精神（文化）や家族の絆を再認識できると思い、両家の生き様をまとめてみることにしました。

いまだ関係者への聞き取りの途中で、歴史的検証がはっきりしない箇所や、写真や遺物なども取集中です。不備な点はお許しください。

(2) 戦前移民の三井家と、戦後移民の堀家

妻のミエはブラジル日系4世で、日系1世の父親と、3世の母親の間に長女として生まれました。父親の堀計介氏は、2005年10月に享年68歳で他界。母親のジョアナマサコ氏（以後マサコ氏）も、2008年9月に享年61歳で他界。現在、兄弟がブラジルサンパウロ州カンピーナス市（サンパウロ州第2の都市）で暮らしています。なお、父親は堀家、母親は三井家で、どちらも熊本県出身です。

母方の三井家は、1913年（大正2年）に東洋移民会社が募集した契約移民として、ブラジルへ移住。第1回の移民からわずか5年後のことで、戦前移民となります。三井家については、マサ

コ氏やその弟のペドロツギオ氏（以後ツギオ氏、サンパウロ市ヴィラカホーン地区、2006年没）から聞き取り調査を行いました。

妻・ミエの祖祖父に当たる三井長久氏と、祖祖母のツタエ氏は、熊本県玉名郡築木村の出身。長久氏は次男ということもあり、新天地ブラジルで一旗上げることに胸を膨らませての移住だったようです。大正2年、1588人とともに若狭丸（総6266トン、船主・日本郵船）でブラジルへ渡りました。このときの移民契約書とパスポート（日本語・英語）が残されていますが、移民契約書には、家族（親族）5人以上という移住条件があり、そのために長久氏は又雄氏を養子とし、妻ツタエ氏の妹夫婦の徳山氏も加えて人数を調整。その際、長久氏の父親は、渡航について猛反対。5年で帰国することを条件に、その証として長久氏の長女Aさん（当時3歳）を日本へ置いていくことで許可しました。

長久氏一行にとっては、希望に満ちたブラジルへの渡航ですが、ここから悲劇が始まります。到着後、長男が生まれましたがまもなく死亡。コーヒー園の労働者としてサンパウロ州コンセイソン（Conceição）市付近に入植しました。渡航後3年目にして次男のサダハルパウロ氏（1914～99年、以後パウロ氏）が出生。その後農園主の許しを得て、同園内に自分の土地を開拓するも、5年目に長久氏がマラリアで死亡（享年35歳）。当時は薬がなく、高熱で他界したそうで、息子パウロ氏が2歳のときです。当時、少しはお金がたまっていたようで、もう少しためて長女を呼び寄せようと考えていた矢先の不幸でした。

ツタエ氏は、2歳の子どもを連れ、日本への帰国はできずに途方に暮れたといえます。子どもたちの幸せも考え、1917年に永田氏と再婚を決意。永田氏との間に2人の息子が生まれました。

その前後、パウロ氏の家族は、サンパウロ州プロミッソン市（Promissão）〈当時は、ノロエステ線のエキトル・レグラー駅〉や、ゴンザーガ市（Gonzaga）などに移り住んでいたようです。このあたりは、1916年の1～2月に入植者のほとんどがマラリアにかかり、栄養状態の悪い食事と医療の不備などから、移民史上、類を見ないほど多くの犠牲者を出す惨事となりました。また翌1917年11月には、ノロエステ線では汽車が通れなくなるほどイナゴが大発生、1919年には大かんばつにあって収穫が半減したと記録に残っています（「ブラジル日本移民八十年史」移民八十年史編纂委員会、ブラジル日本文化協会）。

さて、一方の父方の堀家は、熊本市水前寺で暮らしていましたが、1955年（昭和30年）にブラジルへ移住。戦後の移民が1953年（昭和28年）に再開していますが、そのわずか2年後、アメリカ丸での渡航で、戦後移民となります。堀家のことは、妻のミエはもちろん、そのおじに当たる秋雄（アキオ）氏に話をうかがいました。

妻・ミエの父方の祖祖父にあたる堀万八氏は、熊本県矢部村の村長を務めた方で、昭和天皇の婚礼の儀に出席したといえます。その息子の堀千城（たてき）氏は、戦前の1943年（昭和18年）にゴム園の支配人としてジャワ（インドネシアジャワ島）へ渡航。ゴムの景気が良かったところで、当時の暮らしぶりについて、「ピアノが2台、バイク3台があり、以前はオランダ人が住んでいた邸宅」と記録が残っています。家族を呼び寄せようと考えていたとき、終戦を迎え捕虜となり、3年間ジャワ島に拘束されてしまいます。終戦を迎えるまでの2年間は夢のような生活だったた

め、その経験から他国への移住には強い期待感があり、ブラジルへの移住には抵抗感がなかったといえます。

(3) 日本人らしいブラジル人、パウロ氏

妻・ミエの母方の三井家は、戦前の移民ということで、移住後についていろいろな話が残されています。中でも妻・ミエの祖父にあたる三井サダハルパウロ氏（以後パウロ氏）の生涯は、戦前移民の苦勞や生き様を知ることができます。

先にも記述しましたが、パウロ氏は父親を2歳のときマラリアで失い、母親ツタエの再婚により永田氏のもとで育ちました。結婚は20歳のとき。相手は、同郷・玉名市出身の萩尾ヨシエ氏です。この出会いも運命的としか言いようがありません。

渡航前のヨシエ氏が玉名市に在住の折、パウロ氏と生き別れとなった長女のAさんと偶然知り合いました。ヨシエ氏の叔母が、すでにブラジルのカフェランジャに移住していたことから、その叔母を頼って、農業労働者として萩尾一家も移住を決意。その際、先のAさんから「弟がブラジルにいたので、会ってほしい」と依頼されました。ヨシエ氏はその約束を果たそうと、移住後すぐにパウロ氏を訪ねたそうです。

そのころパウロ氏は、ちょうど母・ツタエ氏が他界し、父親の永田氏とその兄弟とともに暮らしていました。男所帯ということや、父・永田氏のすすめもあって、9歳年上のヨシエ氏と所帯を持つことになりました。それはパウロ氏が20歳の時です。5年後（1935年）、永田氏の実子（パウロ氏から見て弟に当たる人物）が結婚することを機に、パウロ夫婦は家を出る事にしました。実の父ではないことから家には居づらかったようです。

当時、永田家ではフォード社のトラックを2台持つまでに成功していました。パウロ氏は、「トラックを1台分けてほしい」と願い出ましたが聞き入れられず、結局、皿とフォークしか持ち出せなかったといえます。そのとき「がむしゃらに働こうと決意した」ということです。そのころのブラジルの経済を見ると、1897年にコーヒーが暴落し、それ以降、価格の低迷が続いていました。ところが農業政策が功を奏し、1921年ごろから第2次コーヒーの好況を迎えましたが、1929年の世界大恐慌により、コーヒー価格は大きく暴落。こうした経済的な背景もあって、永田氏は、パウロ氏の独立に際してトラックを分け与えることがなかなかできなかつたと推測できます。

家を出たパウロ夫婦は、農地を借り（アヘンダ）でコーヒーを植えました。がさっぱりもうかりませんでした。その後野菜を植え、少しでも高く売るために市場へもって行き、直接売ることもしたそうです。その後、子ども5人（男1人、女4人）を授かり、まずは、男の子のツギオ氏をサンパウロに出して自動車整備士の会社に就かせました。手に職をつけた方がよいと考えた結果です。その後一家は、ツギオ氏を頼ってサンパウロに移り住み、女の子は花嫁修業を兼ねて裁縫を習わせました。

1955年に、業務用のミシン4台を購入し、パウロ氏が営業を行い、娘4人が裁縫を行う、家内工業を始めました。研究を重ねた結果、男性用のズボンが効率よく縫えたそうです。次第に娘たちは結婚適齢期を迎え、嫁いでいきました。そこで1965年ごろにパウロ氏は車を購入し、タクシー運転手を始めましたが、治安の悪化と年齢的なことから息子のツギオ氏の忠告もあって、1975

年にリタイア。その後は、年金と市場でのアルバイト代などで生計をたてていました。

私がパウロ氏に初めて会ったのが、1994年のことです。そのときじっくりと話を聞く機会がありました。特に印象深かったことは、「戦争に負けていたとしたら、今の日本はここまで発展していない」という論調で、日本の敗戦をいまだ信じられないという口ぶりでした。戦後まもなくブラジル日系社会では、戦争に勝ったとする「勝ち組」と、負けたとする「負け組」との間で、痛ましい事件が各地で発生していました。特に勝ち組は、強硬なテロ組織と化し、ブラジル社会からも警戒される存在となっていました。この「勝ち組」と「負け組」との抗争が最も激しかった地域がマリリアMariliaで、パウロ氏が青年期を過ごした所でもありました。戦後50年以上たっても、パウロ氏にとっては敗戦を素直に受け入れられない複雑な思いがあったようです。

また、幼少のころ日本語学校に通っていたことから、日本語や日本文化、日本史に造詣が深く、今の日本人・日本社会の不甲斐なさを嘆いていました。※1938年（昭和13年）、ブラジルでは外国語学校が閉鎖されました。

1975（昭和50）年、パウロ氏は生まれて初めて夢に見た日本を訪れた際、妹のAさんと会いましたが、パウロ氏が思っていたほどの感激がなく、「果たして会うべきだったのか」と後悔したそうです。その背景にはAさんの誤解があったといえます。終戦まもなく、Aさんから物かお金を送ってほしいとの便りがあったそうです。戦勝国ブラジルには、物資が豊富にあふれていると思ったようですが、普通のブラジル人同様にパウロ氏の生活は困窮し、娘を学校に通わせることすらできず、裸足で働かせなくてはならないほどでした。困っている姉のために物を送りたいもできない状況だったようです。またAさんには、両親が迎えに来てくれなかったことへの怨みも十分あったと思われます。

妻・ミエの祖父パウロ氏は1999年に85歳で、一方祖母のヨシエ氏は2002年に96歳で他界。2人の元気な姿が今でも思い出されます。

(4) アメリカに渡ったヨシエ氏の姉

ヨシエ氏の姉Bさんも波乱に満ちた生涯を送っているため、少し話をします。

萩尾の親類で玉名市からアメリカのカリフォルニア州へ渡っていた青年がいて、その両親が見合い話を持ち込んだそうです。Bさんが18歳のときで、新郎がいない状態で結婚式を挙げ、花嫁移住として渡米しました。

渡米後Bさんは、戦時中に収容所に収容され、そこで子どもを喪うという悲しみに遭いました。戦後すぐに帰国しましたが、アメリカ生まれの子どもたちは、日本語をあまり知らなかったということや当時の貧しい日本を嫌って父親とともにアメリカへ戻ったそうです。一方Bさんは、末っ子の娘とともに10年間日本に残りました。その娘は、ブラジルや日本、アメリカに親類がいるため、この国々を行き来できる仕事として、アメリカエアラインズのスチュワーデスになったといえます。1960年ごろの話です。

そのBさんがブラジルに来た際、妻の母親・ジョアナマサコ氏の妹であるキミコ氏（ブラジル日系3世）がアメリカの話聞き、ブラジルの貧しさから逃れたいとの思いからアメリカへの花嫁移住を決意。すでにアメリカに住んでいたBさんの三男・Cさん（アメリカ日系2世）と結

婚するため、Bさん同様に写真を見ただけ、英語もわからないという状況の中で、一人渡米することになりました。1966年のことです。

今の三井家ですが、妻・ミエのおじにあたるツギオ氏は2006年に他界し、その息子2人と娘1人は、ブラジルで名門のサンパウロ大学に進学。ツギオ氏の妻・サキエ氏は母国語であるポルトガル語をしっかり身に付けることを幼いころから子どもたちに教育したといいます。三井家では、パウロ氏が健在のころから、家の中でもポルトガル語で会話をしていました。

(5) 息子たちが救った堀家の危機

ここから、妻の父方の話に変わります。

熊本市水前寺に住んでいた堀家では、妻の祖父・千城（たてき）氏が以前から抱いていた移住の夢をブラジルで果たそうと契約移民に応募しました。そのとき千城氏の姉の主人から、家を買いたいとの希望があり、千城氏の一番上の姉（当時未婚）の世話を条件に、市価の半値で承諾。移住するためには、すべての財産を処分する必要があるため、その条件に応じたそうですが、その後ブラジルで借次に次ぐ借金の苦しい生活を、まだこのときは予想もしなかったといいます。1955年（昭和30年）、コチア青年（ブラジル日系農業協同組合が招聘した青年たち）の第1次109名が同船するアメリカ丸で、堀家も移住しました。サンフランシスコからパナマ運河を経由して、45日間かけての船旅です。船内では退屈なため、甲板をリレー競争したり、赤道祭として仮装したりと、いろいろなイベントを企画して楽しんでいました。新聞も発行されていたといいます。楽しむだけでなく、渡伯してからすぐに仕事ができるよう体がなまってはいけないという思いもありました。大きな土地を買って金持ちになるという、夢を皆が抱いていました。

サントス港に着いた後、程なくしてコーヒーと養蚕を経営する日本人の農場へ配耕となりました。「勝ち組」の思想が根強いパウルー市（Bauru）という町です。パトロン（農場主）が日本人ということで安心していましたが、現実はその逆。朝はまだ暗いうちに起床（5時ごろ）し、弁当とエンシャーダ（鋤）を持って出かけ、暗くなってから帰宅という毎日。カイコを飼っていたため、毒蛇が多く家の中まで入り込んで往生していたそうです。

妻のミエの祖母・アヤカ氏が4人の息子たちのために、お弁当におかずをいっぱい入れ持たせました。おかずといっても干し鰯ですが、当時のブラジルでは高価な食材でした。すぐに資金が底を尽くこととなります。息子たちは、学生の身からブラジルに来たために労働者に成り果てたと、アヤカ氏は毎日涙していました。

7カ月ほどが経って、妻の叔父のアキオ氏が馬から落ちて大けがをし、パトロンにお願いしたにもかかわらず、医者へ連れて行ってもらえませんでした。千城氏とアヤカ氏は、アキオ氏をリヤカーに乗せて町の診療所へ1日かけて連れて行きました。この事件があつてこの農場に見切りをつけ、1956年に別の町・パウルー近郊のドゥアルターナ市（Duartina）へ移ることになりました。カイコを歩合制でやり始めますが、借金がかさむ一方でした。借金とともに家族を悩ませたのが、カスカベルという猛毒のヘビ。桑畑の中にヤシの木を割って壁にただけの粗末な家だったため、カイコを狙って毒ヘビが頻繁に家の中へ入ってきました。身の危険から別の農園への移転を余儀なくされました。

しかし、行き先がなく困り果てたときに熊本出身の同船者の紹介があって、1957年に、スマレー市 (Sumaré) でコーヒー園を営むイタリア人の農場に頼み込んでいてもらいました。「農場の仕事はないが、住まいは貸してもらえる」という条件でした。そこで初めて人間らしい扱いを受けたといいます。あてがわれた住居に入ってみると、こざいかな家でベッドがあり、パトロンが神様に見えたそうです。アキオ氏の話では、学歴の高いブラジル人に初めて会ったといいます。その後も、そのときの恩を感じて、パトロンが亡くなるまで毎年年末にあいさつに行っていたそうです。

借金が膨らみ、途方に暮れた日々を過ごしていた堀一家ですが、1958年、すでに成功を収めていたカフェランジャ市 (Cafelândia) の萩尾氏のもとへお金の工面を依頼すると、快く貸してもらえ、借金を返済することができました。これをさかいに堀家では運が向いてきたそうです。

決して運だけではなく、ちょうど4人の息子たちが働き盛りを迎え、家計をしっかりと支えました。長男で妻の父親でもある計介氏は、農業一本で生計をたて、二男のヤスチカ氏は手先が器用なことを生かして技術者に、三男の絃一 (コウイチ) 氏は商売を、四男の秋雄 (アキオ) 氏は商売からホテル経営者へと、4人がそれぞれの才能や技術をいかして成功を収めたことが堀家の飛躍の要因です。

借金を返したあとは、日本人が開拓した東山農場 (カンピーナス市Campinas) へ1959年に入植をし、野菜のアヘンダ (歩合) をしながらこつこつとお金をためていきました。1960年にブラジル政府は、大農場を小作人に分配するという農地改革、「ヘフォルマ アグラリア (Reforma Agrária)」を実行。その政策の一環として、カンピーナス市にあった元コーヒー農園「ファゼンダ カピバリ」を72区画に分けて格安で販売しました。堀家では、1961年にこの土地を購入。ここまで苦悩の連続でしたが、「家族が力を合わせた結果」と4人の兄弟は振り返ります。

その後、二男のヤスチカ氏は知人で製紙工場の経営者のもとで勤め、四男のアキオ氏も商売を始めるため家を離れて行きました。余談ですが、製紙工場の経営者の息子が、その体格の良さが買われて日本で相撲取りになったと聞いたことがあります。

1965年に堀計介氏は、三井ジョアナマサコ氏と結婚。翌1966年に、私の妻のミエが生まれました。ここにも不思議なドラマが隠されています。堀計介氏の母親であるアヤカ氏の母方の旧姓が萩尾家。一方、三井ジョアナマサコ氏の母親であるヨシエ氏の旧姓も萩尾家。実は両氏はいとこ同士という関係です。堀家は男4人、三井家は女4人ということで、計介氏とマサコ氏は、親同士の間で、ひそかに結婚話が進んでいたそうです。今の時代からすると、自分の知らないところで結婚相手が決まってしまうことに抵抗感を持つことでは、当時の日系移民の社会では、こうしたケースが数多くあったそうです。

(6) その後の堀家

カンピーナス市の農地を買って入植し、野菜や果樹栽培を行っていました。ただし、果樹は収穫までに月日が必要なため、近くの農場を借り、3家族を使ってトマトを植えて生計を立てまし

た。ところが仮の住まいということで、竹を柱に粘土質の土を塗っただけの簡素な家で、電気はなく、夜になると治安も心配なところでした。そのため、マサコ氏の母であるツタエ氏の助言もあって、1年でその地を手放し、元のカンピーナス市の地に戻ったそうです。

1974年に四男のアキオ氏から農機具や肥料の販売を共同経営しようと誘われ、一家でパラナ州のマリンガ市 (Maringá) へ移りました。大豆を植えたり、ディーゼルの燃料を配達していたそうです。その後オイルショックを向かえ、経営が悪化。そのため、カンピーナス市に戻り、その後は畑を管理しながら、近くの養鶏場から卵を買い集め、市場へ運んで販売していました。

1992年、5人の子どもたち〈ミエ (Mie)・エジソン (Edison)・マウリシオ (Maurício)・アリセ (Alice)・ジュリアナ (Juliana)〉が大学へ通うこととなり、学費を得るためや、そのころブラジルではインフレが月々80%もあがるという事態となり、農業では生計が立てられなくなりました。そこで1年間、日本へ出稼ぎに行くことになりました。その際、積極的に出稼ぎを希望したのは、母・マサコ氏。当時の日本を見てみたいという希望があったそうですが、父・計介氏はあまり乗り気ではありませんでした。ところが、マサコ氏は、近所仲間の奥さんの誘いがあって、二人して出稼ぎのための準備を始めました。介護施設での仕事を想定して、サンパウロで介護研修会に出席するなど、積極的に技術や知識を身につけました。

結果、父・計介氏は、千葉の工事現場で、一方母・マサコ氏は神奈川県小田原市の介護施設で、1992年の春から1993年の夏までの1年半、働きました。この就労について、日本の生活が初めてだったマサコ氏にとって、あまり苦痛・苦勞とは感じなかったそうです。しかし、17歳で日本を離れ、40年ぶりに日本へ一時帰国した計介氏にとっては、精神的にも肉体的にもつらく感じたそうです。一番の苦痛は、日本語がうまく伝わらなかったというもどかしさと、食べ物が口に合わなかったということでした。「ここはもう私が住むところではない。帰るのはブラジルだけ」と実感したそうです。

マサコ氏の話では、介護施設の中で日本語が達者でない出稼ぎ者に対する差別的なこともあったそうですが、「熊本の田舎からでてきました」と話すと、快く接してくれたということで、日本人の「うち・そと」の関係を実感しましたが、それも思い出の一つとして、楽しく語ってくれました。

(7) 私がブラジルへ、ミエが日本へ

私・栄社は、1986年に奈良大学文学部地理学科を卒業し、大阪書籍(株)に入社。文部省検定教科書「中学社会 地理的分野」の編集者として、1992年までの6年間勤務しました。この間、文部省では、学習指導要領の全面改訂が行われ、地理的分野も学習内容が大きく見直されました。こうした仕事に携わっていく中で、南米に多くの日本人が移住していることやその人たちが日本へ出稼ぎに来ていることを知り、実際自分の目で確認してみたいという希望が芽生え始めました。サラリーマンを続けながら、長期休暇をとって現地へ行くことはむずかしく、国際協力事業団(現・国際協力機構JICA)の海外開発青年(現・日系社会青年ボランティア)制度で南米へ行く決心をしました。それまで培った編集という特殊な仕事は、現地からの要望がないため、農業指導という立場で赴くことに。そのため、海外移住を希望する青年を1年間かけて育成する制度「海外移

住研修生」として、横浜市磯子区根岸にあった海外移住センターに入所（海外移住研修制度も海外移住センターも現在はありません）。語学や移住の歴史、日本大学農獣医学部で農業技術を学びました。その後、一時広島へ戻り、広島県農業技術センターの花弁部で研修を積み、1994年4月にブラジルへ赴任しました。活動期間は1997年3月までの3年間（現在この制度は2年間に短縮されています）でした。一時期、アルゼンチンへ赴任することを希望していましたが、南米の花事情を聞くうち、ブラジルへの赴任と決まりました。

一方、妻ミエは、カンピナスカトリック総合大学土木建築課〈PUCC (Pontificia Universidade Católica de Campinas, Engenharia Civil)〉を卒業後、建設会社 (Pina Figueiredo) に就職しました。「一度は日本にいてみたい」という希望を持っていたところ、国際協力事業団（現・国際協力機構 JICA）の海外移住子弟研修生の制度を知り応募。合格して、福岡県にある榎長大で架橋設計を学びました。研修先へ赴く前の2カ月間、横浜の海外移住センターで日本語と日本文化を学んでいたとき、私と知り合うこととなりました。その後、ミエが1993年に研修を終えるのを待って入籍しました。

私は、1994年の春に海外開発青年（現・日系社会青年開発ボランティア）としてブラジルへ赴任。サンパウロ州アチバイア市 (Atibaia) タンケ地区でバラを栽培していた青山農場（青山明政さん、当時46歳、14.5ha）に入りました。青山農場は、バラの切花を中心に宿根カスミソウの栽培をされていました。ブラジルのバラ栽培が、まだまだ露地栽培が主流の中、他の農場に先駆けてハウス栽培を導入。バラの品質向上、冬場の収量増産に向けて努力されていました。農業資材は日本の価格と変わらず、現地では割高。そこで大工を農場内に雇い、木製のハウスを52棟も自前でつくるなど、日本では考えられないダイナミックな経営スタイルでした。私はここで52棟のうち11棟を受け持ち、日々、バラの選定や仕立て方、収穫、農薬散布、肥培管理を現地の作業者と一緒に行いました。またブラジルの経済状態を考慮しながら低コストによる生産方式の確立を目指して試験も行っていました。

ミエとの新婚生活もここからスタート。現在の日系社会青年開発ボランティアの制度では、赴任期間中夫婦が一緒に暮らすことはできません。ところが当時（旧制度の海外開発青年制度）では、「活動終了後に移住」という制度上の目的もあって、私たち夫婦は一緒に生活することが認められました。初めての地で不安も多かった私にとって、ミエが支えてくれたことは言うまでもありませんでした。ミエは当時まだ目新しかったパソコンを使っただけの経理を担当しました。パトロンである青山明政さんには、家族ぐるみで世話をさせていただき、感謝の言葉もありません。

ところが1年が過ぎたころ私が農薬中毒になり、国際協力事業団サンパウロ事務所所長の上杉光則氏と須田課長の計らいで、青山農場を出てサンパウロ市の日本語普及センター（現・ブラジル日本語センター）で教科書作成と、日本語普及センター付属ジャバクワラ校で児童への日本語教育を行うことになりました。そのため、サンパウロ市リベルダージ (Liberdade) 地区ガルボンブエノ街にアパートを借りて暮らすことになりました。期間中に赴任先を変えることは今の制度では考えられないことで、当時の国際協力事業団サンパウロ事務所の方々に多大なご迷惑をおかけしたと痛感しております。

このとき、日伯修好100周年という節目の年ということで、日本語シンポジウムが行われるこ

とになり、私はその準備を任されることになりました。1世の方々が、移住してまずつくったものが学校。飲まず食わずの状態でも日本語学校を作り、次世代に日本語とともに日本文化も伝えてこられたことを知りました。ブラジル社会には日系移民に対して、「ジャポネース ガランチード」(勤勉で真面目な日系移民)という言葉があります。これは、日系人に対する信用と信頼を象徴する言葉です。1世の方々が日本人としての誇りを持ってブラジル社会で生きてこられた証となるものです。ところが私は、「日本語を外国語としてどのように教えるべきか」という教授法ばかりに関心が向き、日本語学習に込められた日本文化の伝承という、1世の方々の思いを十分にくみ取ることができませんでした。日系社会を活性化させる任務でありながら、無神経な言動と、浅はかな情熱によって、日系の方々の心を踏みにじったのではないかと、当時のことを思い出すたび、心が痛んでなりません。

一方ミエは、竹中工務店サンパウロ支社に入り、工事の現場責任者として活躍。大型ショッピングセンターや日本食レストランの内装工事、国際協力事業団サンパウロ事務所の移転に伴うリフォームなどを担当し、日本での研修がここで生かされることになりました。

(8) おわりに

私たち夫婦は、1997年に日本へ戻り、私はすぐに広島リビング新聞社へ編集者として入社しました。一方、妻のミエは、2人の子育てが一段落した2003年4月から仕事をするために行動を始めました。ハローワークの外国人相談コーナーで仕事を探していたときのこと。ハローワークの担当者から、ポルトガル語の通訳・翻訳をすすめられ、「日本で研修をさせてもらったことに少しでも恩返しができれば…」という気持ちから、広島労働局や裁判所、また広島県が運営する国際センターの「外国人総合相談窓口」で働くことになりました。日本とブラジル両国のために微力ながらもお役に立つことが、私たち夫婦の責務だと思っています。

植木栄社・広島リビング新聞社 取締役
ミエ・広島県国際センター 外国人相談窓口

家族史-B 井上克・実家

「私の家族・ブラジルと日本」(井上克 91才・実 長男64才)

(1) なぜ？ ブラジルへ

昭和初期、日本経済は深刻な不況に見舞われ、多くの日本人達は国策に乗せられるように外国へと夢を求め、南米や満州などへ次々と渡っていった。

そのような国内状況の中、父（克）の姉婿にあたる岡本右作さんもその一人だった。悉く商売に失敗し、大借金を抱えどうにもならない状況で決意したのが「一攫千金」の夢を叶えてくれるであろう「ブラジル移民」であった。

当時の移民制度には、一家に12歳以上の子供がいることが条件であった。この条件に合わない場合、3親等以内で12歳以上の子供が、構成家族員として参加している必要があった。一般的には、これがなかなか満たされず、断念せざるを得ない人達もいたようだ。岡本右作さん一家にも12歳以上の子供がいなかったが、幸いなことにその条件にピッタリあてはまる少年がいた！甥に当たる私の父である。

父に白羽の矢が向けられたのは、ごく自然なことであった。と言うのは、そのころの父は、尋常小学校の運動会では、何をさせてもズバ抜けていた。走らせれば、ついて来る者はナシ。騎馬戦は、大将。棒倒しは、相手の肩から頭へと一気に駆け上がって引き倒す。また、今で言う「課外活動」はコレまた文字通り「課外活動」であった。「西瓜畑の西瓜割り」、「航行中の連絡船の船底へ潜ってのハイタッチ」、「肥壺ダイビング」等々。いつも大勢の子分たちを引き連れて村内を闊歩し、「逸話」の絶えない少年だったらしい。岡山県小串村阿津という小さな漁村では誰もが持て余し、困った少年であった。

「ブラジルへ行けば、バナナが食べられる」という一言に、5人姉妹の末っ子だった父は即決してしまったのだ。母の説得を振り切って、「ブラジルはバナナが腹いっぱい食べられる国」に岡本さん一家と、帯同することになった。ただ、「バナナ」欲しさの決断であった。

同級生達の多くは戦場に駆り出され、村を闊歩していた子分たちの多くは戦死されていることを考えれば、日本に止まっていれば戦地に駆り出され、「末っ子」、「勝ち気」、「年格好」からして、第一線部隊への出征は間違いのない所であっただろう。

さらに付け加えるならば、岡本右作さんがブラジルを選択したのも、大きな分かれ道であった。ご承知のように満州方面へ行かれた方達も多い。

仮に岡本さんが満州を選択していたとすれば、岡本さん一家はもちろん、父の存在すらも危ぶまれただろう。

いずれにしても、命と引き替えに明日を生きなければならない地と、少なくとも難行苦行はあるにせよ、自らその道を切り開いて生きていける地とでは、後の一生を大きく左右することとなり、ブラジルへの移民は岡本さん一家のみならず、父の運命までも「生路」へと導き、そして「バナナ」こそが、父の大きな運命の分かれ道を決定づけたのだった。こうして、ブラジル移民への体制は整ったのである。

家族構成は、岡本右作（33歳）、岡本小静（35歳）、岡本賢太郎（9歳）、岡本喜代志（8歳）、

岡本幸子（4歳）、井上克（13歳）（構成家族員）だった。

(2) 行くまで、ブラジルへ

当時、ブラジルへの移民が決まると日本全国の移住者達は移住教養所（後の移住センター）への入所が義務付けられていた。それ以前の移住者達は、各自神戸市内の旅館に泊まり、出発当日乗船していたらしい。しかし、それでは移住者の把握や諸手続きに支障を来たすので、新たに建設されたのが「移民収容所」（昭和7年から神戸移住教養所と改名）であった。そこではブラジルや他の国々へ移住する人達に対して、ブラジル語の日常会話、移民先での生活ぶり、移住者としての心得などについて教えるのを目的とし、健康調査等も行なわれた。

父達も移住教養所の4階の一室で1週間過ごした。岡山の小さな漁村から出てきて、始めて見た神戸の街や坂道の上に聳える4階建ての白い移住教養所の建物、すべてが興味を引く驚きの世界であった。4階から見渡す神戸の町、そして当時高い建物もなく神戸港から大阪湾を一望する景色、建ち並ぶ渡航用品販売店の賑やかさ、さらに店内に並べられた見たこともない商品の数々、どれをとっても13歳の少年にとっては、すべてが別世界そのものだった。

研修期間を終えると、いよいよ日本から「不安」と「希望」の入り混じった旅立ちである。皆それぞれの思いで、日本での最後の一夜を迎える。父達も出発前夜、移住教養所前の坂を少し下った洋食屋で、カレーライスを食べたそうだ。その時、岡本右作さんの「コレが日本での最後のご飯だなー。もう2度と食べられないだろう」と、感慨深げに語った時には、さすがの父も涙があふれ出たらしい。

(3) さー ブラジルへ

昭和7年12月、ハワイ丸での出発当日。神戸港第四突堤。約800名の乗船も終り、出航を待つだけである。移民船と岩壁の間は、幾重もの五色のテープで繋がれており、船上から見下ろすと岩壁のコンクリートはおろか、見送る人達の姿すら五色のテープの下で見え隠れするほどであった。突然「ドラの音」が響き渡った。岩壁からも、船上からも、一斉に「ウオー」と関（とき）の音があがる。掛け合う声はそれまでと違って、より一層大きくなっていく。「違者でなー」「ガンバレよ！」から「元気で帰って来いよ！」「必ず帰って来いよ！」と、もう二度と会うこともないであろう別れを、否定するかのようなそれによって変わった。

纜（ともづな）を解かれ誰知ることなくいつの間にか岩壁から離れ、波間を漂っていた移民船は、「蛍の光」に送られながら、ゆっくりと動き出した。いつしか、どこからともなく始っていた渡伯の歌（渡伯同胞送別の歌）「♪行け行け同胞、海越えて、遠く南米ブラジルに♪」の大合唱。

こうして神戸を出航した移民船は、当時、インド洋からアフリカ南端の喜望峰、大西洋を横断して南米へと、一航海約56日間の船旅であった。移民船は、香港、シンガポールを經由してインド洋へ抜け、コロンボからアフリカ大陸を目指して、赤道を斜めに横切り南西へと航海を続けるが、空調設備などのない鉄板に覆われた甲板下の客室は、「人いきれ」と遮る物ひとつなく船体に降り注ぐ「太陽熱」で蒸せ返っていた。

穏やかな船旅が続くうちはまだ良いが、大時化（しけ）の時もあった。激しい時は20メートル

以上はあろうかと思われる大波が、絶え間なく襲って来る。波の頂上まで持ち上げられた船体は、「スクリュウ」のカラカラという空転音をさせながら船首から船尾をはるか上方に残し、波底を目指し急降下していく。次の瞬間、青い海面は真っ白な大波を立て大きく左右に割れる。この繰り返しが延々と続く。それに当然ながら横揺れが加わるのでとても独り立ちはできない。食事時は、食器類を乗せたお盆が前後左右へ移動し、お椀ごとひっくり返ってしまう時もあった。もちろん食事など咽を通らない。いつも賑やかな船内もこの時ばかりは人声もなく、時々お互いに青白い顔を不安そうに見合わせ、時化が過ぎ去るのを空腹感と睡眠不足で待つだけだった。

(4) いざ！ ブラジルへ

約2ヶ月近い船旅を終えて、翌8年2月、移住者達はサントス港に上陸した。航海中、共通の目的を持った約800人の人達には、日本で別れた親戚、知人とは違う「別れ」が待っていた。船中では、置かれた立場が皆同じであり、互いに利害関係もなく、心からすべてを話し合える良き相談相手であっただけに、殊更に辛い「別れ」であった。しかし、「お互いに元気で頑張り、成功していつか会おう」という再会を期した、希望に満ちた「別れ」でもあった。

サントスからは、予め決められた各地の植民地へ列車で移動する。列車内では、これからブラジルでの成功と来航を歓迎して、モルタンデーラ（ハムの一種）、パステウ（餃子の大型判）とフェイジョアータ（豆汁）等々ブラジルの代表的なご馳走を振舞ってくれた。しかし、今まで食べたことのない妙な味の食べ物ばかりのため、ほとんどの人たちが車窓から投げ捨てたらしい。半年も経たないうちにその美味しさがわかって、毎日のようにたべるのではあるが…。

「各地の植民地」といっても良い広い国。列車で2～3日の移動になる。ただし、駅舎に時刻表があっても単なる数字の羅列に過ぎない当時の列車事情からして、時間と距離は全く噛み合わないのが普通だった。ひとたび駅に停車すると1～2時間の待合せは普通で、原因を尋ねてみると「前の列車が、止まっているから」と、それくらいのことが分からないのか、といった顔つきで、実に「的を得た」解答が帰ってきた。現地の乗客も「それなら仕方がない」と、不満もない様子。

サンパウロを中心に入植先のある鉄道沿線はノロエステ線、パウリスタ線、モジアナ線、ソロカバナ線がその代表であった。岡本さん一家はソロカバナ線沿いのバストス(Bastos)に入植した。日本を発つこと60日間、2月は日本とは逆の夏、長旅の末ようやくたどり着いたバストス植民地は、まるで今までの不安を打ち消し、希望と夢を叶えてくれるような一面の「綿畑」であった。

「何処まで続くのだろうか？」と、思わせる紺碧の空。限りなく続く空の青さを遮るように鬱蒼と茂った森の緑黛。その麓から鮮やかに一線を画して、なだらかな起伏を繰り返し、点々と立つ木々を囲みながら目の前に迫る綿畑の緑色。今まで見たことのない壮大な「大自然」であった。

(5) あー あー ブラジル

あてがわれた小屋で荷を解いた翌日、自分達の畑を下見することになった。乗ったことのない馬に現地案内人と「二人乗り」で、前日見た広大な大自然を肩越しに眺めながら時間の経つのを忘れていたころ、たどり着いたのが森の端であった。そこでの案内人の一言は、

「ここから幅20m、奥行き500mが開墾地だ」。

それまで「農作業」を行なうものとはばかり思っていた岡本さんは、「森林の開墾」とは考えもしなかった。遠目には鬱蒼とした森であるが、覗き込んでみれば直径1mはあろうかと思える大木に藁が絡まり、さらに根元を覆い隠すように、身の丈以上もある雑草の群生であった。それらが1万㎡の中に点在しているのだ。さらに一步踏み入れたそこは、亜熱帯林独特のムートとした湿気と臭い。辺り構わず飛び交う訳の分からない虫の騒めきに、それらを捕らえようと張りめぐらされた蜘蛛の糸。足を踏み入れることすら躊躇するような茂みであった。

どうにもならない悪童だった父はどうであっただろうか？ さぞかし「こんな仕事出来るか」とばかりに投げ出すかと思いきや、逆にその「悪童ぶり」の矛先を「開墾」へと向けていった。岡本さんは、日本からのわずかな持参金を持って、早速、町で道具をそろえ、開墾に取り掛かった。まず、雑草、小木などを、ホイス（鉋の一種）とファッコソ（大型の刀剣）で、下刈りしなければならない。道具は当然すべて大人用に作られているため、父はまだ良いが、賢太郎と喜代志にとっては非常に扱い難かったようだ。しかし、父はその悪童頭ぶりを発揮して、ひるみがちだった賢太郎と喜代志を引っ張っていった。

雑草、小木などの下刈りを済ませ、次に取りかかったのが立ち木の伐採である。直径1m以上もある大木の伐採であるから、並大抵ではない。それらはすべて自己の耕作地内に倒さなければならない。出来るだけ地面に近い所を見計らって倒すべき方向から、2人でマッシュャード（斧）を交互に打ち振るい、切り口を少しづつ深めていき8分通りきたところで、反対方向から切り口を入れる。そう思う方向へ倒れていくはずだが、仲々うまくはいかない。伐採した木々は枝を払い、4～5mの長さに切断していく。これには、トランサド（長さ2mほどの両引き鋸）を使用する。トランサドは、両側から2人で引き合いながら切断するが、まだ身の丈の低い賢太郎、喜代志にとっては到底無理であった。当然岡本さんと父の仕事になる。こうして切断した木々や枝は一度に焼いてしまうのだが、この時の「火煙」は相当なもので紺碧の空が一面黒い煙に覆われて、それが何日間も続いた。

こんな重労働の中、岡本さんや父親を非常に悩ませるものがあった。「ビッショ」や「毛ビッショ」という虫だ。農業に携わった移住者達の間では、知る人ぞ知る「有名虫」である。「ビッショ」は爪と皮膚の間に潜り込み卵を生むが、その時の「かゆみ」は半端ではなく、瞬く間に「増殖」して手に負えなくなる。最初は「かゆみ」が生じ、成長してくるとその部分が徐々に膨らみ始め、皮膚の内側を噛みつき「チクチク」とした痛みが始まる。その時はすでに手遅れになっている。それを皮下から取り出すのであるが、切開して取り出そうとしても人体に食らいついて容易には離れない。相当な痛みを覚悟せねばならない。

このように肉体労働を行なうには最悪の条件であり、蚊や虫と戦いながらの想像を絶する重労働は、移住者達の「ブラジルへの希望と夢」を、瞬く間に消失させてしまうものであった。耐えきれず夜逃げをした人、精神障害を来たし、いつの間にか行方知れずになった人、ブラジルへ移住したことによって、残りの人生を不本意に送らざるを得なかった人たちも、相当数にのぼるものと思われる。

こうして2～3ヶ月経ったころ、借金まみれで移住した岡本さんは、多少の日銭はもらっていたようだが、「半人前の賃金に、二人前の食い扶持（ぶち）」では、日本からの持参金も底が見え

出した。そこで、毎日の行き帰りに通る小川で泳ぐ魚を見て思いついたのが、「かまぼこ」であった。育った漁村の隣家が「かまぼこ屋」だったので手伝っていたことを思い出して「かまぼこ」を造り、日銭を稼いだ。

「かまぼこ」には魚が必要だが、一日中魚釣りをする訳にもいかない。そこで試みたのが、ロープの先に針状に直径5cmほどに曲げた有刺鉄線を紐で結び、その先に3cm角ほどの豚の切り身を引っ掛けるといふ、まるで「鯨でも釣りに行くのか?」と思わせる「仕掛け」である。もちろん棹は天然物で、川を覆っているところあいな木の枝にロープを縛り付け、それを流して置くだけ、という手間要らずのもの。早速、朝仕事へ向かう途中、立ち木の枝に5～6本を仕掛けて、帰りにロープを引き上げてみると、「おるワ!、おるワ!」、なんと全部の有刺鉄線の釣り針に体調80cmはあろうかという魚(現地名=ピンタード)が、ぐったりとしていた。

「さすがにブラジルは大きい国、釣る道具も桁外れであるが、釣れる魚もデカイ」と、思いも依らぬ釣果に皆は大喜び、笑いの渦だった。もちろんこの「ピンタード」は頻りに食卓をにぎわしていたが、一方「かまぼこ」も、まさか地球の反対側まで来て「口にできるとは」ということで日系人の間で評判になり、結構日銭の足しになったらしい。

こんな状況が10ヶ月ほど経ったころ、岡本さんは、いつまでも先の見えない伐採仕事と、底の出てきた日銭稼ぎに不安を抱き始めていた矢先、ある地主から借地の話が持ち上がった。この話をまとめた岡本さんは、直ぐ引っ越すことにした。そこはサンパウロ州の地方中核都市プレジデnte・プルデnte (Presidente Pludente) 近郊で日系人が多いところであった。ここも紺碧の空に鬱蒼と茂った緑の森。始めにパストスで見た光景とは、何ら変わっていなかった。しかし、「綿畑の緑色」は、身の丈ほどもありそうな一面の雑草畑であった。

さらに困ったことにこの畑には住む家がなかった。日本から持ってきた所帯道具のうち、とりあえず必要でないものをすべて換金し、最低限の農機具、道具だけは揃えたが、家を建てるほどの余裕はもうなかった。急ごしらえの「家」は、寄せ集めた木材を芯に、ヤシの葉で壁・屋根を覆い被せただけ。ヤシの葉の隙間からは星空が見える代物であった。床は土をならしただけ。雨でも降れば家の中は大洪水。風呂といえば、拾い物のドラム缶を輪切りにして、それを石の上に乗せ、下から薪を燃やす。当然、家の中で風呂を湧かす訳にはいかない。焚けば、たちまちヤシの葉に燃え移るので、風呂は屋外である。しかも火が燃え移らないように、住居からかなり離して置かなければならない。

(6) よしっ! ブラジル

こうして、どうにか生活の基盤ができ、いよいよ「自分達の畑」で綿の栽培を始められるメドが立った。しかし、時期は1月であった。「綿の種まき」の時期である10～11月は過ぎていた。その年の10月に「種まき」をしたとしても、収穫が翌年の4月頃になる。岡本さんにとって、1年以上無収入で暮らさねばならない。だが「収穫さえ上がれば」という今までになかった大きな目標ができたので、自ずと「開墾」に力が入り、取り敢えず伐採から始めた。

そこにはパストスで得た経験が生かされていた。父は、マッシュャードを使っての立ち木伐採から、2人で引き合うトランサドを使っての切断、さらに埋め込むための穴掘りまで、ほとんど一

人でこなした。賢太郎と喜代志も、手に負えなかった作業を徐々に身につけ、自分が成すべき作業を理解し始めたことは大きな成長であり、岡本さんや父にとって大助かりであった。当然ながら、能率もずいぶん良くなっていった。約2ヶ月におよぶ伐採が終り、次は雑草畑の草刈りである。だが、この草刈りは容易ではなかった。トラクターでもあれば見る間に終わってしまうが、当時はそんな機械もなく、すべてが人力であった。

暮らしぶりはほとんど無収入。「かまぼこ」があるとはいえ、とてもおぼつかない。日本からの衣服は、大半が気候の違いで役に立たず、使える薄手の物も、過酷な労働に耐えきれず「継ぎ接ぎ」。それも消耗が激しいので、半年も経たないうちにほとんどなくなり、とうとう仕事着1着。「食」の方は入植直後、憧れの「バナナ」を毎日食べていた父も、今度は否応なく「バナナ」が主食に変わってしまい、明けても暮れても「バナナ」の生活だった。他の人達も毎夜「ロープの仕掛け」に釣られたピンタードの連続であった。ただ、ブラジルは果物が豊富であるため、自然の食料だけでもある程度は暮らしていけるので大助かりだった。

しかし、ついに借金生活も底をついてしまった。岡本さんも行き着くところまで行ってしまい、仕方なく移住者の間ではあまり評判の良くない商売人に頼み込むことにした。精神的にいちばん惨めな時期であった。あの頃ほど惨めな思いをしたことはなかった。

初めて「綿花の栽培」を始めるので、すべてが他人からの伝授による「栽培」となり、どうしても今一歩何か足りない部分が出てくる。さらに10万㎡に及ぶ綿畑の管理は、岡本さん一家を見た場合、少し無理があると思えた。当然の結果として綿の作柄は、他と比較してかなり見劣りするものであった。しかし、どうにか人手を借りずに岡本さん一家だけで、「綿摘み」が可能な程度の収穫があり、わずかばかりの現金を得ることができた。岡本さんにとって、日本を離れて初めて手にした、まとまった現金であった。

ふり返ってみればこのわずかな現金を得るまで、どれほどの労力を使い、すべてをかなぐり捨て、見知らぬ人達にまで何度も頭を下げ工面を乞いに行ったことか。それは、生活程度の低さと、日本で夢見ていたブラジルでの自分達の姿を重ねた時、あまりにも惨めで大きくかけ離れたものであった。

それだけに岡本さんは、この現金の用途には、熟慮を重ねたことだろう。思いあぐねた末、借地代を1年待ってもらい、借金の返済なども猶予を頼み込むことにした。わずか1年ではあるが、綿栽培で得た経験と教訓による揺るぎのない自信から生まれるその態度、所作は、十分相手を説得させるものであった。

説得に成功した岡本さんは、農業を営む上で最も必要な「馬」と、家畜としての「豚」「鶏」をそろえなければならないと判断し、そのわずかばかりの現金で、物色を始めた。「馬」は労力としてだけではなく交通手段としても必要だったが、いちばん高価なものであった。大金を払って買うほどの余裕はなかった。そこへ「若くて安い馬がある」と言う現地人の奨めで、何とか手に入れることができた。実際かなり安い「バロン」である。これで農作業はずいぶん楽になり、広い畑で手綱を引けば素直に反応し、実に従順な馬「バロン」のお陰で農作業もより以上に順調に進み、万人の力を得た気分だった。

「馬」を導入したことにより、畑の草刈りもずいぶん楽になり、余った時間は他の日系人の

所へ「日銭稼ぎ」や例の「かまぼこ」売りに回り、食いつないで行くことができ大助かりであった。一方、「豚」や「鶏」は繁殖させたり、卵を生ませたりして食用として飼っていた。「豚」からは石鹸を作ったり、食用としても十分なカロリーを得ていた。

やがて、2回目の種まきの時期がやってきた。皆にとって恐らく、それは前年の経験からして待ちに待った「種まき」であった。「プランテラ」(種蒔き機)も増やし、種や機械の運搬はすべて馬にやらせ、害虫の消毒も前年の失敗や経験をうまく活かすことができ、害虫対策にも抜かりはなかった。

このように、経験から学んだことを活かし、小まめに管理を続けていった。そして綿の生育ぶりから、そこには何かを期待させるものがあった。

(7) おっおー ブラジルにも？・綿の大豊作と運命の悪戯

冬のないブラジルに春がやってきた。

入植して3年目

気候にも恵まれ、下働きの努力のかいあって、「綿の大豊作」であった。身の丈ほどあった雑草畑、未開墾の密林は見事に緑の綿畑に変わっていた。やがてポツンポツンと開き始めた綿花は、日を追うごとに増え続け一斉に開花し、一面白い綿で覆い尽くされたのであった。その光景を眺めながら岡本さん達は、さぞかし大喜びであっただろう。綿をひとつひとつ摘んで、腰にぶら下げた麻袋に詰める「綿摘み」にも力が入ったに違いない。丹精を込め育てた綿花だけに、この時期、雨と害虫の被害を受けると取り返しがつかなくなる。短期間に終わらせなければならず、とても自分達だけでは間に合わないの、現地人を4、5人雇い、無事収穫を終えることができた。

そして、現地での借金をはじめ地代まで返済してしまい「住まい」もいつの間にか板張り内風呂つきで、トイレも完備した立派なものに変わっていた。「綿の大豊作」は4年目も続き、日本での借金も全額返済し終えた。それにもましてこのころから父は、もはや誰にも引けを取らない体力と気力で、岡本さん一家を引張っていき、賢太郎や喜代志もそれにつられるように一人前以上の働きをするようになっていた。18才の父・14歳の賢太郎・13歳の喜代志であった。

しかし、この直後、思いもよらぬ事態が発生したのである。

「岡本家次男・喜代志の死」

喜代志は引越した直後から「足が痛い、足が痛い」と訴えていたが、近くには医者がおらず、仮にいたとしても土地の購入に大きな借金を抱えた直後だっただけに、急場の治療費の工面ができなかったろう。父も賢太郎と喜代志3人でこれからの生活を支え「大農場」を夢見てはばたきかけた時だけに、その落胆ぶりは相当なものだったようだ。今でも「あの時、すぐに医者へ連れて行けば、助かった命だったのに…。お金がなかったばかりに、喜代志には本当に可哀想なことをした。」と、思い出しては涙ながら悔しがる父である。

(8) やれやれ ブラジル

道筋が決まりかけ、「いざこれから！」と言う時に働き手を一人失った痛手は大きかったが、「喜代志の分も頑張らねば…」と、父や賢太郎の「綿栽培」に対する気構えをさらに強くさせるもの

になった。

2年間、作業効率の悪い土地にもかかわらず必要に応じて現地人を雇い、父や賢太郎の奮闘・努力の結果、収穫は前の借地を大きく上回り、年々増加していった。もはや揺るぎのない立派な「綿栽培農家」となっていた。

このような土地でさえ立派に収穫が上がるのであれば、もっと効率の良い土地なら数倍の収穫が見込める上、この勢いに何としても乗っていかなければならない。さらなる飛躍への大きな転機にきていることを感じていたのは、岡本さんだけではなかった。バストスに入植して以来共に苦労を分かち合い、岡本さん一家を外から眺めていた「松崎氏」も、その一人であった。彼は自分の畑の隣が売りに出るのを知り、早速岡本さんに勧めた。場所はベンチャードという所で、面積は50万㎡であった。(約700m四方の土地・前の土地の5倍)。

多少の躊躇はあったが、岡本さんは購入することにした。やっと自分の納得できる土地を手に入れることができたのである。ベンチャードはボア・ビスタの土地と違って緩やかな起伏はあるものの、非常に効率の良い土地であった。松崎氏をはじめ、何十家族もの人たちが同じように「綿栽培」を行っており、その光景は正に彼達が初めて見たバストスの風景を超えるものであった。見渡す限り紺碧の空と綿畑だけで、どこを見渡しても空と畑が接していた。「どこまで続くのだろうか」と思わせる、一面の「綿畑」であった。

父や賢太郎の「みなぎる意欲と競争心」を掻き立てるには、十分な環境であった。現地人を大勢雇い、父と賢太郎は先導となり引っ張っていった。単一面積あたりの収穫高は、周りの農家と比べて問題にならないほど群を抜いていた。この頃になると、計画的に作業を進められるようになり、父や賢太郎は日本人青年団に所属して、野球や互助活動に参加するほどに余裕ができていた。野球チームに参加していた父達は、賢太郎が四番・ピッチャー、父が三番・キャッチャーと、中心的な存在であった。

岡本氏が日本で描いたブラジルでの自分の姿を、漸く実現するまでにいたったのである。苦節8年目にしてであった。

(9) ブラジル生まれの二世モモ子さんとの結婚

そして5～6年過ぎた頃、独立願望が強かった父は、縁あって昭和18(1943)年に江藤モモ子と所帯を構えることになった。この人が私の母である。因みに、母方の江藤家(祖父)江藤勝太郎、(祖母)モヨは、大正2年、移民が開始された初期に、福岡県浮羽郡から新婚でブラジルへ渡った。モモ子は、江藤家の長男・勝、長女・薫、に続く次女である。したがって、母はブラジル生まれの二世、私達は戸籍上三世となる。江藤家が入植したのはノロエステ線のリンズ(Lins)という所であった。

(10) 出来た！ ブラジルっ子

しばらく岡本さん一家と共同で綿栽培を行っていた父達は、新たに畑を借りて耕作を始めることになった。場所は、やはりプレジデンテ・プルデンテ近郊のノヴァ・アメリカであった。戦時中であり「薄荷(ハッカ)」の需要が非常に多いのに目を付けた父達は、その栽培を手がけた。

しかし、戦争の大勢が決まりかけると共に「薄荷」の需要は急速に落ち込み、もの見事に失敗してしまっただけでなかった。

この間に長男（一郎）を出産したが仮死状態で、この世の光を受けることなく土に還っていった。続いて翌年、第二子長男・実（著者）を授かった。この時も助産婦が間に合わず、ただ「出産の経験がある女性」ということで、隣の黒人女性が私を取り上げた。全くの自然分娩である。出産後といっても、母（モモ子）にとって産後の休暇はなし。4日目から母子共に、畑仕事に出かけなければならないという厳しい現実。農作業中は日傘を差して寝かせておき、様子を見ながら母乳を与えていたが、影を求めてやってくる虫たちに皮膚を刺されたり、蟻などは鼻や口の中まで入り込んだりした。このような状況では、畑仕事もなかなか手に就かなかっただろう。やがて半年ほど経つと、子供を家に置いたままの畑仕事であった。母にしてみれば、赤子をひとり置いて畑仕事に出掛けるのは、やはり後ろ髪を引かれる思いだっただろう。

第一子（一郎）を失った両親の目に毎日続くこの光景は、もはや農業からの撤退に拍車を掛ける他の何者でもなかった。「薄荷栽培」の失敗もあり、農業も時代と共に少しずつ変化しており、「豊作貧乏」にも悩まされていた。

もはや、この地で農業を続けること自体を考える時期に来ていた。いろいろと構想を練った末、岡本氏はサンパウロ郊外で野菜の栽培をすることになった。一方、父達は雑貨商を営んでいた石橋豊臣さん（アルバレス マッシュャド市）や中村和夫さん（プレジデンテ プルデンテ市の隣接町ピラポジンニョ）の勤めもあり、また元来の商売好きも手伝って、中村和夫さんと同じ町のピラポジンニョ（通称＝ピラポ）で雑貨店を営むことになった。

こうして、約13年余りに及ぶ暑い土地での辛い農作業に別れを告げるようになった。それは入植以来、賢太郎と一緒に青春という人生の最も華やかな時期に共に苦労を重ね、悲しみや喜びのすべてを分かち合い、見事に花咲かせた岡本さん一家と父との惜別の時でもあった。

苦節13年目であった。

(11) いいぞ！ ブラジル

雑貨店を始めることになった父母は、潤沢に資金があるわけでもなく、開業準備に相当な資金を要したため、仕入にも事欠くほどであった。棚には商品がパラパラの状態。それでは商売にならないのでいろいろ考えた末、拾ってきた空き缶や空箱を商品の間に並べ、どうにか店らしい構えに見えるようにした。汚れているそれらを現地人が、安く買おうとすれば、「アレは見たとおり汚れている。コッチの方がキレイだ。キレイということは新しいということだ。」と強引に押し奨める父に、妙に納得して買っていったそうだ。

ピラポは小さな町だったが、郊外には日本人の大きな牧場や農家が多く点在しており、そこに勤める現地人達の食事や日用品は、雇い主が揃えることになっていたもので、そのほとんどがトラック単位で、一度に大量の買付けであった。徐々に品数、種類も多くなり、「日本人」だということで仕入れ関係にも信用ができ、商売も軌道に乗り始めた。どのような日用品でも揃えておけば、一度に全部捌けてしまう。商売としては非常にやり易かったようだ。

一度に大量に買い付けるため、ピラポだけにある特定の品物が、突然なくなってしまうことが

よくあり、特に「米」はその最たるものだった。父は、普段からサンパウロ州内を駆け巡っている仕入先の営業マン達から、半径200～300km以内の町の商品市況を聞いており、「どこの町のどこの店に、どのようなものが余っているか」を把握していた。ある品物が少なくなると、その営業マンを通じて早速現金を持って買い付けに走る。昼間は店が忙しいので、当然夜駆け朝帰りになる。そして、ピラポにその商品がなくなる頃を見計らって、小出しにして売った。

こんな商売のお陰で、2年も経たないうちに20m×40mの土地を購入し、そこへ倉庫と店舗と住居を無借金で新築してしまったのである。それは目先が利き、努力を重ね、信用を得た証でもあった。さらに商売には相手と話す言葉が大事だが、それには2世の妻モモ子さんの役割が大きかった。

ある時「大きな幹線道路の工事が始まる」ということを知ると、爆破に必要なダイナマイトの販売許可を得るため奔走し、2年掛りでようやく手に入れた。中核都市のプレジデンテ プルデンテにも売っていないダイナマイトが、こんな小さな町で売っている、というのでたちまち評判になり、それにつれて雑貨もさらに飛ぶように売れていった。

雑貨店を営みはじめた頃は、日本では太平洋戦争の終戦を迎え、大きくその方向を変えようとしていた時であった。

地球の裏側のブラジル。その田舎の小さなピラポでも、終戦の影響を受けた。いわゆる日系人同士の「勝ち組」、「負け組」の対立である。日本は戦争に勝ったのだと主張する「勝ち組」。日本は戦争に負けたのだとする「負け組」。「勝ち組」の論拠は、日本は「この戦争に負けて、勝ったのだ」というもの。はなはだ理解に苦しむものであるが、戦前の学校教育の有り方を考えれば、その論争根拠は間違っていたとしても、戦争に負けたことをそのまま素直には認め難いものがあったのだろう。「神国」日本は、有史以来「蒙古襲来」や「日露戦争」に見るように、外国との戦いに負けたことがない、という徹底した教育からしてである。一方、「負け組」は、事実を認めようとしないう「勝ち組」に対して、神経を逆撫でするような態度や言語を取り、さらに戦前の日本において国民に崇められていた「昭和天皇」への誹謗中傷を続け、「勝ち組」の反感を買う結果となってしまった。この「勝ち組」「負け組」の対立は一時深刻なものになっていた。小競り合いは頻繁で、時にはそれがエスカレートして、「離縁」や「殺人事件」にまで至ったこともあった。また、「勝ち組」の中には、自分の目で確かめたくてわざわざ帰国し、敗戦国日本を見て神経障害を来し、自殺した人までいたという。

ただ、常に「負け組」が被害者になっていた。父は、カチカチの「勝ち組」だった。そのトラウマからなかなか抜けだせず、昭和31年8月日本に帰国した時、神戸港に停泊していた米軍の軍艦を見て、初めて敗戦を実感し納得したそうだ。

(12) ありがとう！ブラジル（ムイト オブリガード）

戦後6～7年が経ち、雑貨店も軌道に乗り、貯えもそれなりにできて、夢だった牧場の構想を練り始めていたころ、ふと思い出したのが「母」のことだった。「母の元に、帰りたい」の一念だった。入植直後、布団の中で、ヤシの葉の壁の隙間から星を眺めながら、思い出すのは「母」のことばかりだった。13歳で親元を離れ、毎日の過酷な労働に、自分だけが「岡本家の人間では

ない」という負い目もあって、誰にも甘えられず、気持ちの持って行き場のない、ただ働くだけの日々だった父にしてみれば、自然に湧き出てくる「思慕の念」だった。そう思うと、居ても立ってもおられない。早速、雑貨店の買い主探しに奔走した。幸い近郊の大牧場主が名乗り出て、交渉がうまくまとまり日本帰国が決まった。父達にすれば、母親の年齢、私達子供の年齢（長男の私が11歳）、その町の将来性などの状況を考えると、「今しかチャンスはない！」と判断したのだった。今思えば、あの時期に帰国していなければ、恐らく家族全員での日本帰国はあり得なかっただろう。よくも思い切ったものである。もちろん、帰国には母の英断が非常に大きかった。知人、親戚は皆無の異境の地で11歳の私を筆頭に、幸子（9歳）久子（7歳）章（5歳）恵子（1歳）5人の子供を、それまでとは全く違う場所で育てなければならない。そのままブラジルに止まれば、経済的な心配もなく、周りからは「ドナ マリア」、「ドナ マリア」と慕われていたのが、全て変わってしまう。

「**勇氣のある決断**」だった。

昭和7年12月、神戸を「はわい丸」で出発。昭和31年8月神戸に「あふりか丸」で帰還、往路はアフリカ経由。復路はパナマ経由。24年に渡る地球一周の長い旅であった。努力を重ね「運」と「人」に恵まれ、それが見事花開いた父にとって、ブラジル移民は長かったが「貴重な旅」であった。

帰国後、古里「岡山」の母「小金」への報告は、言葉でこそ一言もなかったが、親類縁者たちが取り囲む中、あれほど母に会いたがっていた父は、自慢の家族達と、ただ無言のまま座った。24年間耳にすることのなかった年老いた母「小金」の「よー頑張ったのー」の一言に、マッシュカードやエンシャードを握った両手は固く握られ、小刻みに震えていた。その拳には大粒の涙が、両肩の震えと共に止め処なく落ちていた。父の流す涙、一粒一粒には、辛かった24年間の思いと、母「小金」に対する思慕の念が溢れるほどに詰まっていたに違いない。その時私が初めて見た父の涙は、今でも鮮明に記憶している。

母「小金」は、私達の帰国2年後に他界されたが、父達の「大決断」により、どうにもならなかったあの末っ子とその家族達と再会を成し得、歩んだ人生の報告を受けたことは、反対を押し切ってブラジルへ旅立った親不孝に、有り余る程の孝行であったのは疑う余地がない。立派に成功して帰ってきた我が子の姿を見て、何一つ思い残す事無く逝った事だろう。

帰国時の私達の家族構成

父・井上 克（36歳）、母・モモ子（34歳）、長男・実（11歳）、幸子（9歳）、
久子（7歳）、章（5歳）、恵子（1歳）

帰国後の私達家族は、父の努力と母の辛抱強さの甲斐あってこれまでやって来られたが、やはり当初かなりの混乱と戸惑いがあった。父の古里、岡山市阿津に一時身を寄せた私達であったが、私と幸子はブラジルで日本人小学校へも通っていたのでそれほど苦にならなかったが、久子と章は学校での言葉の問題等で登校拒否を起こし、ずいぶん母を困らせたようだ。

ここで母のことに少しふれておきたいと思う。母は幼い頃から畑仕事に明け暮れ、父と一緒にあってからも私を宿しながら百姓で身を粉にして働き通した。商売を始めてからも、深夜まで商品の値札を付けたり、ブラジル語が堪能でなかった父に代わって現地の人達の対応に追わ

れながら、5人の子供を出産した。恐らく気の休まる時などなかったのではないだろうか?、やがて落ち着いた頃に父が日本帰国を決意。

母にとって母国とは言え、それは「異国での再出発」といった方が正しかった。日本語の読み書きの不自由さに加え、世界でも稀にみる日本独特の生活習慣。そんな中で5人の子供を育て上げ、独立させるには相当に惨めな思いもし、又辛かっただろう。惨めさと生活環境のあまりの変化についていけず、思いあまって何回か末っ子の恵子を連れて神戸港の岩壁へも行ったらしい。様子を心配してブラジルからも母親・モヨと義妹・瑞江も訪日して励ました。おかげで、月日の経過と共に徐々に日本に慣れ親しみ、落ち着きを取り戻していった。昭和60年私達が皆独立した頃には、もはや完全に日本人になりきっていた。

だが一方で、この頃から母の中には誰も気付かなかった別の闘いが始まっていた。リュウマチとの闘いであった。以来20数年にわたり、薬の副作用に始まって、悪性癌の摘出、誤飲性肺炎など、身体の心臓を除くほぼ全機能を病魔に侵され、何度も危機に直面した。医者からも幾度となく最後通告を受けながら、それを悉く克服してきた。しかし、平成17年12月27日午後8時20分永眠してしまった。

帰国した翌年、神戸に移った私達は少しずつ落ち着きはじめ、生活の安定を求めて父は借家を4棟購入した。ブラジルとの貿易を強く望んでいたが、アレコレと模索したがうまく行かず、「国内で有望な産業は何か」を考察した結果、手掛けたのが「住宅産業」であった。2年間土木関係の仕事に従事し、その賃金とブラジルの残り資産で分譲住宅の販売を開始した。そして、私が大学を卒業すると同時に、歌手「都はるみ」の大ファンであったことから、屋号を「都住建(株)」として設立し、本格的に分譲住宅を事業化して行った。

今ではすっかり日本人になりきっている私達一家であるが、やはり私にとってブラジルで過ごした幼年時代は、何時までも心の奥深く刻まれており、4年前に一度訪れた時、45年前とほとんど変わっていなかったピラポの町並みや通りの名前を見て、懐かしさがよみがえって涙が溢れてきた。

この町を去る時もう一度、50年以上前に建てられ、未だに残っていた父達の店の前に立ち、改めて父や母のその足跡の素晴らしさに感服の念を禁じ得なかった。しかし、この時には、父が私の誕生に植えた記念樹を見つける事が出来なかった。あの大平原の中でマンゴーの木を1本探すのは困難とは言うものの、非常に残念であった。しかし、それはもう一度ここへ来なさいという神のおぼしめしだと思い、そのチャンスをうかがっている次第である。できれば父と共に。

井上克・「都住建(株)」会長、実・同社長

家族史-C 森村家

「私の生い立ちとブラジル、そして家族」(森村吉蔵 76才)

(1) 誕生

昭和八年（一九三三年）十一月六日。本州北端の街青森市で、父福蔵・母トセの森村家八人兄弟のうちの七人目として生まれる。平成天皇と同じ年。

学歴

小学校時代

青森市立^{たほこ}寛町尋常小学校入学、五年生のときに疎開学童として市街南方丘陵地の農村、横内村小学校へ。

昭和二十年七月二十八日

青森市街は、米国のB29 170機による傷痕弾爆撃により消失。土曜の昼過ぎ疎開先の横内村から帰った夜のできごとであった。「火の地獄」のなかを逃げ回る、家と学校を失う。そして、八月十五日、『終戦の宣告』玉音放送を焼け野原となったトタン屋根の小屋で聞く。

まもなく、戦勝国側の進駐軍が上陸してき、町は米兵を乗せたジープで一杯となる。

中学校時代

昭和二十一年、旧制県立青森中学校入学。

学校は消失しているため、暫く空き家探しの授業をしていたが、そのうち一時、進駐軍が使っていた旧陸軍の第五連隊兵舎に移り、そのままの建物を教室替わりとしていた。

中学校生活が始まる、学校全体が課外活動の部員募集で大賑わい、運動はこれといって得意なものがない私はそこいら一面にはられたポスターを見て、かっこういいテニス部を選ぶ、家に帰って父にラケットというものを買ってもらうことにした。父もわからずテンテコまい。どうやら形を整える。

先輩たちの練習がすんでから、暗くなるまで球を追いかけ。夜「北斗七星」を見ながらクシヤクシヤになるまで練習した。

そのうち、学制改革で、旧来の中学がなくなり、新制中学が三年、新制高校三年となり、そのまま新制高校にすすむ。

二年生の春、弘前中学と学校対抗試合、このとき始めて家から離れて外泊。

新制高校最終学年のとき県代表として「第六回国民体育大会」に出場が決まる。

テニスの会場は「呉市」、開会会場「広島」、天皇の挨拶に感激し、原爆ドームに手を合わせる。

昭和二十七年三月 新制青森高校卒業

このとき、テニスができる「青森製氷会社」に就職口が決まっていたのに、「お前には大学までいってほしい」と突然父から言われ、今からだと普通の大学入試には間に合わないしどうしようかと慌て探し回ることになり、青森庭球連盟にお願いしてみることになり、運よく「日本大学」の手続きに間に合わせてもらった。

大学時代

昭和二十七年四月、「日本大学」の法学部法律学科に進学。軟式庭球部に入る。

日本大学は、その頃、全日本選手権を三年連続制覇しており、凄い勢いでした。

テニスコートのある下高井戸の教養学部裏門のすぐそばに下宿を見つけ、コート整備から外部の高校生たちのコーチなどに出掛けていたり、とにかく忙しい毎日の生活だった、三年生になった頃から部の主務と「全日本学生軟式庭球連盟常任理事」などを兼務させられて、日本中を駆けずりまわる多忙さだった。

そうこうしている間に学業を終えることになってしまい、将来の職業を考えるときになった。

昭和三十一年（1956）日本大学法学部法律学科卒業。

職探しも儘ならず困り果てていたとき、その頃、日大の中に「国際研究部」と言う新しい学部が新設されることを知り、早速これに応募してみることにして手続きを取る。いろいろ聞いてみたところ、これは夜学であって週一度「外語大の先生から外国語を習い、外に外務省のお役人から海外の農業事情を聴講するだけ」と言うこと。

暫くして、国際研究部中南米研究班を覗いたところ、気の早い人達は、すでにブラジルにいていけると言うことが分かり、さっそくブラジル行き希望の書面をつくり提出。そのうちに「単独呼び寄せ移民」と言う方法でブラジル側の身元引き受け先も内定、船便で行くことになる。船は「オランダ汽船」になる。

郷里の青森で父母は理髪店を経営しており、父とは大学卒業後10年間は自由にさせてほしいとの約束をもらっての旅だったが、母は移住目的を察していたようで最初は反対だった。

ブラジル移住手続きに入り、政府の貸し付け「単独呼び寄せ移民」として、23歳で横浜港を発つ。旅券には「農業移住で永住を目的」との記載がある。

(2) ブラジルへの出航

1956年9月9日、西回り南米航路、RIL（ROYAL INTER-OCEAN LINE）会社所有のオランダ汽船「ルイス号」

9 / 9 横浜から14世帯 - 25人

9 / 15 神戸から103世帯 - 122人

11 / 6 RIO DEJANEIRO着

11 / 7 SANTOS着

神戸を出航すると、当時はアメリカの領土であったオキナワのナハから移住者達が無言のままタラップを登ってき我々に合流した。その後、ホンコン、シンガポール、モーリシャス、ロレンソマルケス、ダーバン、ケープタウンを経て大西洋側を出た。途中、大波にゆられ船酔いに悩まされ、「赤道祭」を出身地毎の仮装行列や民謡で競い合いながら祝ったりした。そのうち移住者一行はこれから向うブラジルのことで話題が一杯となる。

本船は貨客船であるために、人間の運搬もさることながら貨物の荷揚げ、荷下ろしがあり、港に着くごとにハッチが忙しく、クレーンがウナリ、人夫が立ち働き、私たちの二段ベッドのある三等客室はあたかも戦場のようなことになることしばしば。

船員のほとんどが中国人で、夜になると、皆、思い思いの「ござ」を持ち出してそれをベッド代わりとして、食堂の椅子、テーブルの上に広げて横たわっている。夜ごとのマージャン競技は激しい。

上級船員はオランダ人でさすがに素晴らしい、赤毛の髭を生やした大柄な体格の人が多い。移民監督官とか、日本政府の人達と比べても引けを取らない。

私は子供達の教育係りを受け持ち、毎日忙しく三等客船の間を駆け回り、子供達を掻き集め、甲板に出てピンポンをしたり日本語などの勉強を教えた。

(3) ブラジル着 (BRASIL)

1996年11月7日 SANTOS着

“RUYS号”は埠頭に接岸。上陸、待合室に入る。頑丈で歴史を感じさせる木製の長椅子が天井の高い建物の中に並んでいる。今までの日本人だけの顔ばかりでない。見たこともないガイジン達がうようよして雑然。緊張のしどろし、キョロキョロソワソワ、コーナーにあるBARに立つ。自分の口から声を出す。

“Cafe/erveja カフェ・セルベージャ・・・コーヒー／ビール

おかね=Dinheiro (Cruzeiro)

会話に度胸がある。でも、なんだか用事が足せそうである。

同船者のなかの団体のようなコチア青年達が隊を組んで待合室から居なくなり、ほかの家族連れの人達も出迎えの人達と一緒に出て行く。

朝、着いて、昼過ぎて、夜、星が出始めてから迎えの人が現れる。長距離用のバスに乗せられてサンパウロに着く。

色の黒い男達が荷物をバスから下ろしたり、狭くて暗い階段を上り下りしていつの間にか薄暗い汚いペンションのバネのはみ出したベットのある部屋に落ち着く。

私のほかに日大経済学部出身の志藤君、早大中退の神戸の中島君、小指のない消防士の伊沢さんの4人がある。

日本大学が引受先として内定してくれていた「日輪学舎」を訪問したが、そこは日系移民達の子供をあずかる寄宿舎のようなところで、3～4部屋があり、10人足らずの学生児童の世話をするのが主な仕事であった。

ここは我々4人の夢を満足させるところではないと判断。1週間ぐらいいし、北方の海岸線沿いにあるCaraguatatubaカラグアタツバというところにあるバナナ園へ向うことにする。

(4) そして・・・バナナ園

大西洋の荒い波が打ち寄せる海岸道路を土埃を上げて北上し走っていた車が止まり、道路端に下ろされる。荷物を運び、その道路端から150メートルほど山手に入ったところにある小屋へ。

そこでは、高知県出身者と言う小さな叔父さん「小原さん」と、でっかい叔母さんと四才ぐらい女の子が待っていてくれた。

この日から私達はみんな「新米さん」と呼ばれるようになる。

翌朝、森に連れていかれる。立ち木を切る。運び出す。

一行がこれから生活する小屋は、窓は木の板、出入り口も木の板戸、壁は土かべ、床は土間。立ち木を適当な長さに切って寝台を作る。電気はない、水道はない、ドラム缶のお風呂に小川から水を汲んで沸かす。

時の流れが分からない、世の中のことも分からない。

「新米さん」はバナナとバナナの間に入り伸びてくる雑草を刈る。叔父さんと伊沢さんと私と中島君と志藤君が横並びに並んで道端から始める。今日も明日も。

バナナの葉の裏側にはよく蜂が巣を作っているし、地面には大きな食用蛙とか、猛毒を持つ蛇がいる。何しろ農園は広い。一通り草刈りがすんだころには次の雑草が伸びてくる。バナナは1本の木に1年に1房ぶらさがってくる。その房には5段から12段のバナナが実る。バナナの実のいりが十分になる頃、叔父さんはこれの切り出しを始める。切った重いバナナの房を担いで道端まで運ぶ。色の黒い人達は力が違う。滅多に話もしない。

ある日、私の元に、RUYS号の同船者の一人であった川窪青年から手紙が届く。

「あれから自分はコチア産業組合の社員として仕事に就いている。あなたは船の中で子供達に日本語の先生の仕事をしていましたね、今、サンパウロから50kmぐらい離れた組合から「日本語の教師募集」が出ているみたいです。」

日本からの船旅の中で知り合ったウクレレのうまい川窪青年のことを時々思い出していた。そんなある日彼から手紙が届いた。もちろん飛び付いた。手紙に対する返事よりも何よりも、バナナを選びにくるトラックの青年に頼んでサンパウロへ。彼の勤務するコチア産業組合へ飛んでいく。

早速サンパウロ市から47kmはなれたところにある農村で、コチア産組の組合員の多く住んでいる現地へ。

バナナの汁で汚れた手のままコチア産組本部へ、そして、指示されたVargenGrande村へ向う。電気がある。ラジオはある。400mのグラウンドがあって教室・寄宿舎、70名の生徒、立派なもの。

この村の文化部長、総務、会計と校長先生との面接と言うことになったが、お酒を飲みながら会話が弾み、採用決定。

(5) 農業と言う職業から離れて・・・

日本語学校勤務するが免許がない。

寄宿舎で児童と一緒に生活すること4年。子供達に日本語を教え、スポーツをやる。

夜間の成人教室に一年間通って、義務教育の教師の資格証明を取る。

無我夢中で、一年が過ぎ、貰った給料をしっかりと握って、校長先生の許しを得た後、テニスコートを作ることの許可を得た、「書籍・スポーツ部品」を売る店へ走る。

中古ラケットを4本、ボール2ダース、それに、新品のネット1張り買い揃える。

テニスコートの大きさに合わせて土地を均しローラを掛けて出来上がり、部落の有志に声を掛けたところ意外に多くの愛好家が集まり、びっくりする。

日本語学校の仕事とテニスの練習を両立させるべく頑張る。何はともあれ、この地方のテニス

クラブを探す、そしていろんな情報や正しい打球を教えてもらうことにする。

日系のテニスクラブを探し当てることに成功、そこにおられた「田中又男先生」から手解きを受ける。福岡出身の方で奥地で日本語学校をしておられたそうで、とても厳格な方でした。

これが幸いして「邦人のテニス選手権大会」への参加が許された。

どこへ球が飛ぶのか見当も付かないうちの仲間のテニスであったが、練習を重ね硬式テニスを身に付けた。そしてなんと「全伯邦人庭球大会・新人の部」で優勝（36才）を果たした。

4年間いただいた給料はがっちり溜める。

(6) 最大の都市に職を得て、サンパウロ市にうつりすむ

テニス界の重鎮、西川さんの経営する日本からの書籍雑貨を輸入する店「西川小野商会」に丁稚として勤務することにした。

夜学で、タイプを習い、免許も入手。「輸出業務」の書類作り、銀行業務の使い走りをする。

4年間の貯蓄を使って土地を買う（頭金10%）10m×30m 10年払い（日本の父から資金US\$100,000を借り受ける）。自分の人生計画を立てる。

土曜日は半日、日曜日は丸一日、VARGEN GRANDE時代に知ることのできた友人、二世の小関パウリーノさんが青年部の副会長を勤める傍ら大工仕事も器用である。この人に頼み込み私の家造りを手伝って貰うことにする。私はもっぱら、レンガ運び、土をコネ、水はこびなど、生まれて初めての作業を続ける。天井があがってガラス窓など入れたところで、未完成のまま、1962年1月10日に結婚する、27才。

6才違いの妻孝子は、昭和八年、宮城県からアリゾナ丸で移住してきていた両親を持つ二世。父は日本語学校の笠間校長。吉蔵のことは理解してくれていたが、念のため素性を説明するものを見せよということになり、故郷の青森から古いアルバムを取り寄せて説明し承諾してもらって式を終えた。

孝子はコチア産業組合に勤めていたがその後いきなりツワリが始まり、体が弱る。当初予定していた二人の共稼ぎは断念せざるを得なくなる。

孝子は小柄で、健康には自信があるものの、限界があるようだ。結局、家計を助けてきてくれた彼女には、会社勤めを止めてもらう。それからが大変、なにしろ収入の道が絶たれてしまった。

そんなある日、トイレにぶら下がっていた開いた儘の新聞、そこにあった求人募集の記事、日本からの進出してきている会社が求人募集していた。「運を天に任す」とはこんな事でしょう。

トイレを出て小さな声で震える手を押さえながら電話を掛ける。電話の向こうで、「木下産商」はいまだ採用を決定していないと言う。合掌。

(7) 木下産商株式会社

2ヶ国語ができて、現地事情も通じているため現地社員と言うことで合格。

希望する給料の額面？は聞かれて、生まれてくる子供、自分、そして、妻との生活費。何と会社側は全てを支払うと言って、一気に就職が決まった。労働手帳を見ると、1962年6月22日と記

録している。

10月30日に長女が生まれる。

何がなんだか分からないままに夜学で覚えた要領で、“TELEX”に向き合い、日本語で或いは英語で書かれたメッセージを打ち続ける。

社員は4～5名。サン・パウロの深夜は日本の昼。まさに24時間休みなしの仕事となってしまう、仕事、仕事、仕事をした。

朝、出勤すると、“TELEX”のテープを整理する仕事に追われる。商社言葉、ポルトガル語での電話の受け答えは神経を磨り減らす。

ようやく仕事に慣れ、2年くらい経った頃、日本から派遣されて来ていた駐在員が本社へ帰ることになり、つぎに就任してきたのが片言のポルトガル語を使うと言う、訳の分からない妙に威張ったヘンテコな駐在員がやってきた。これがイカン。

「ワカゲノイタリ」と言うのかも？、あっさり「退職願」を出して、退職。

ところが、たまたま同社に長い間勤務していた現地採用の萱森 ELIOさんも一緒に退社、二人は意気投合して、二人で新しく会社を立ち上げることにした。

(8) それがMAMI代理店

まず最初に、先にお世話になった「西川小野商会」に駆け込み、輸入している「さくら印X光線フィルム」の、売り込みをさせてもらうことを頼み込み、これがOKとなり、出来高に合わせた口銭をいただくことで、サン・パウロ近郊にある病院と言う病院を訪問して売り込むことから始まる。足を棒にして、暗いうちからバスに乗って、……。シャニムニ、それからと言うものは寝ても起きても物売りをすることに精進。

さらに「東洋綿花」が輸入して滞貨していた「体温計」を大手薬局“ONOFRE”に売り込む。「まるは大洋漁業」がストックしていた「鯨の歯」を売り抜く。「野村通商」が輸入していた、「工業用耐熱高温度計向けゲージガラス」を売り込む。

そのうち当時現れ始めたプラスチック製品の販売権を勝ち取る仕事を見つけだし、自活の道がようやく開ける。

そして、いよいよ、MAMIの名前で輸入手続きをしようと、伯銀を訪問した後に立ち寄った伯国三井物産（この頃、木下産商も吸収合併されていた）にさそわれた。

(9) 伯国三井物産

勧誘に弱くて、1966年2月、自営業社長から再度一介の商社マンへ転向した。

その頃、ブラジルは1956年に就任した大統領クピチェックの「50年の遅れを5年で取り戻そう」と言う機運が強く、首都移転、基幹産業の育成、自動車産業の導入、など忙しく、大国、ブラジルが長い眠りから覚めてようやく動き出した頃であった。

日本から進出してきた「伯国三井物産」は大企業で給料も上がった。仕事は主として鉄鋼や製品の輸出入で、取り扱い量も大きく毎日が楽しかったし、日本との時差のため連絡等でここでも昼夜なく働いた。

日本への出張も命じられ、故郷の青森の家族とも再会する。

ブラジル側大手企業の、日本への照合や打ち合わせのために同行したりで忙しく働いた。子供も3人となり家庭も安定していた。この間、新しく家を建てたいと考え、10年払いの月賦でサンパウロの中心地から23kmに2500㎡の広い敷地を購入した。

日本からの進出企業も、800社をこえるほどの盛況ぶりで、あらゆる分野での競争が激しく繰り広げられていたこともあって、とくに鉄鋼課は毎日忙しかった。実に良くブラジル中を駆け回る毎日であった。

日本からの輸出

ブラジルへの進出を始めた海外の自動車企業向け、日本からの鉄鋼製品輸出。

基幹産業の一つとなる電力会社の大手産業向け、電磁鋼板、電線、など。

ブラジルからの輸出

ブラジル地下資源調査と開発協力、鉾石の輸出。

進出企業 古河電工のブラジル進出への手引きなども行った。

仕事としては実にやり甲斐のある男の仕事で悔いはなかったし、この頃が絶頂期であった。

ところが、1973年のあの「石油ショック」からおかしくなりだし、仕事も、採算もくるしくなってきた、長い間の鉄鋼課勤務から、機械課勤務へ移動。そして、1986年に20年の勤務を解かれてしまった。

解雇されて、しばらくは休養を取っていたが、この間に2度目の（現在の）家の建築を行った。

そして・・・またまた

MORIMEX 単身の事業に、54才からの再出発、創業した。

主な仕事は

- ・特殊ケーブル（IT産業用）
- ・電子端末部品
- ・旅行関係業務を合わせ勤める

我々奈良大学の海外巡検も取り扱ってもらえ、この時すでに子供さんにも会えたが、2年後の移住100年祭式典時には、終了後、家庭を訪問、画家の奥さん（孝子さん）や娘さんとお孫さんまで紹介してもらえた。

人生は終ることなしと現在も76才（2009年）で活躍しておられる。

家族構成

吉蔵（1933生）、孝子（1939生）、長女 ジャンネ（1962生）、長男 エンリケ（1964生）、次女 リタ（1969生）、三女 レニタ（1972生）。

現在、次女リタ・孫と同居。

(10) さいごに、今もテニスで

私の人生の支えとなり、今も楽しんでいるのが「テニス」である。所属は、日系の産業組合が

主催、すでに60年の歴史を有する全国組織で、COOPERCOTIA ATLETICO CLUBEである。そして今は亡き「田中先生」の居られたクラブの名称である。

このクラブは、会員制になっており日系人だけでしたが今は誰でもが会費を払えばメンバーになることができる。

現在は会員が大体1300名、テニスコートは12面、ほかに野球とかフットボール、水泳プールなどほとんどの設備を備え、大きな室内運動場、それに文化活動もできるような会館まである。

私も76才に成りますが、高齢者も増え、テニスでは94才の方も元気で走り回っている。クラブの休日は月曜日。

全国大会は毎年7月にサンパウロで開催される。

参考までに私のテニス大会の成績は、1963（36才）年男子復で初優勝、1964年復・単で優勝、1969・70年復で優勝、1982・83年壮年復で優勝、1984年壮年復で準優勝、1993・98・99・04年70才以上復で準優勝。

現在も日曜日の朝には、家内の運転でクラブへ。

画家の家内は絵画教室で先生。孫は卓球。

今（6月）は晩秋の季節、日増しに寒くなり、テニス大会のある七月は毛布をかつい歩き。76才日本を出て53年元気に頑張っています。

森村吉蔵・自営業 MORIMEX

孝子・画家、絵画教室講師

〔Ⅲ〕 移住・移民史の中での位置づけ

開国、そして明治維新後は、職業による身分差別は無くなった代わりに、国民皆兵・徴兵制が施行された。そうして、さっそく日清戦争さらに日露戦争にかり出される。結果は戦勝となったが、帰国した若い兵隊達に見合う職業の用意はされていず、彼等の中から海外へ取りあえず3年間ほどの出稼ぎを目的としてハワイさらにはカナダやアメリカへと向う者も多かった。

筆者の家系や親族の海外移住も、そこからスタートしている。

しかし、目標国にはすでに先行していた黄色の支那（中国）人達が働いていた。彼等は言葉も通じず食べ物や身なりも異なるクーリ（苦力）と呼ばれる若い男達の集団であった。ボスの指示に従ってまるで働き蟻のように低賃金で働く異様な存在で、先住のヨーロッパ系の人々や労働者達からは、仕事を奪う集団として攻撃され排斥されていた。

ところが排斥された彼等の跡を継ぐ労働者が必要である。そのために動員されたのが、同じアジア系の新入りとして黄色の日本人労働者達だったのである。その後の結果は当然ながら、先行中国人苦力同様の攻撃（黄過論）であった。

そこで、次の目標となってきたのが南米大陸であった。日本からは地球の反対側に当り遠いが、ブラジルに行けばコーヒーという金のなる実をつける木があり、家族で3年間も働けば大金を得て、故郷に錦を飾れるという。

ブラジルでは、労働力が不足しているので、日本人の家族を待っている。そこは、国名も漢字では「伯刺西爾」だが、当て字で「舞楽而留-楽しく舞って留まれる国」と紹介、そのような宣伝に乗せられて出国したのである。

A. 明治末～1920年頃までの初期の集団移住

最初は、明治41（1908）年4月28日781名を乗船させ神戸港から出航した「笠戸丸」であった。インド洋からケープタウンを経て大西洋を横断し、52日間の航海の後6月18日にサントス港へ着いた。上陸後、サンパウロの「移民収容所」に終結後、それぞれ分散して各地の農園ファセンダへと配送されていく。

現地では契約労働者コロノとして、さっそくコーヒー畑で夜明けから日没時まで家族で働かされる。しかも、馬に乗った外国人の見張りに監視されながらの労働であり、精神的にも屈辱的であった。そのような過酷な状況であったが、皆、何がしかの借金を持ってきており、いずれ大金を得て帰国するための出稼ぎ労働だと思い頑張った。ところが最初の期間の手当てを受けて驚いた。なんと入金どころか、日常生活のために農園の売店で購入していた代金として天引された分の方が多く、これではさらなる借金ではないか。交渉しようとしても言葉が通じない。ストライキしても、始めから両者の思惑が違いどうにもならない。

農園主にとってみれば、1888年に奴隷解放令が施行されて以後、労働力が不足していたのを、アジアからやってきてくれ、おぎなってくれた者達であり、労働者のあつかい方にも、当時の方法を維持しようとした。つまり、日本人達は奴隷の代役だったのである。

それは、日本人労働者だけではなく、奴隷解放後を補なう労働者として至急に移入されたスペ

インやイタリアなどのヨーロッパ系の人々も同じで、あまりにも苛酷な労働と使い方に反発して本国へ訴えたため、イタリアでは政府が送り出すことを止めたほどである。

このような状況下で、配送された農園から逃げ出し、他の仕事へと転職したり、アルゼンチンへと転航する者が多かった。第1船の笠戸丸で移住した者のうち、次年まで最初の農園にとどまっていた者はわずか40名にすぎなかった。この状況は日本にも報告されてきたが、すでに第2回移民船へ向けての準備が進んでおり、若干おくれていたが出航してきた。同様に苛酷な状況下の労働ではあったが、定住者は906人中681人とやや好転した。その後も、第3回移民船・第4回移民船が、サントスへやってきた。

このころ日本では、日露戦争時の戦費のつけが大きく国民の肩にのしかかってきていた。農村では小作農争議や地主の没落者も続出、都市では労働争議が各地で勃発していた。このような社会状況下でブラジルへと目指した者も多かったという。

そうして笠戸丸からわずかに5年後に当る大正2(1913)年には、本論で登場してもらう。

- ・堀さんの祖祖父母が熊本県の玉名郡から。
- ・井上克氏の妻となるモモ子さんの両親が福岡県の鞍手郡と浮羽郡から。
- ・さらにここに深くは取り上げなかったが、アントニオ上野氏の両親が筆者の郷里の隣村福岡県三井郡から、そろって同年に出航されている。この年には4隻がブラジルを目指している。

入植地では多難な生活は続くが、少しずつ現地の状況がわかってくるに従い何とか対応もできるようになる。たとえばコーヒーの樹間で野菜を作らせてもらったり、農園内の空地でトウモロコシや綿を作ったり、川沿いなどの低地や湿地では日本人得意の稲作も行えた。

ただ大変困ったのは病気で、特にマラリアと労働中の怪我であった。医者はいないし、街へ行って診てもらったり、入院する金もなかった。そんな中でも子供への教育、特に日本語を教えることは大事とした。いずれ日本へ帰国した時に困らないようにとの親心でもあった。

B. 1920年～大戦前までの移住

初期の移住者達が、日本出航時に抱いていた夢と現地で体験した苛酷な労働とのギャップはあまりにも大きかった。

ところがその後も移住者達は続々と到着してきた。最大の問題点は、送り出す日本側と受け入れるブラジル側両者間での思惑が全くすれ違っていることにあった。そこで生ずる根本的トラブルを緩和するには、現地のファンゼンダ経営者のもとへ契約労働者として出向き、いいなりになって働かされるのではなく、日本側で最初に土地を確保し、その土地を区画し、移住者達に分けて開墾させること。さらに管理のためには、組合を組織し種々の問題もそこで処理しながら協力して効率を上げるほうが良いと考えた。

このような考えに沿って、日本側では、出発前に土地を確保する団体ができた。そのうち代表として「ブラジル拓殖組合(ブラ拓)」がある。ブラ拓では、バストスBastos・チエテTiete・トレスバラスTres Barras・ノーバリアンサAlliansaなどに入植地を確保。入植者は日本にいうちに概ね移住地が決定していたから、定住を覚悟する者も現われた。

当時の社会状況も厳しかった。1929年には世界恐慌が発生、経済は低迷し、混乱した世相が続

く。日本では1923年に関東大地震が発生、1931年には満州事変が、1932年には五・一五事変と続き、国際連合からも脱退する。気候も不順で、特に東北地方や北海道には冷害が発生、飢饉の状態となり、人身売買まで起こっている。

このような状況下で、ブラジルへの移民も続く。この期の移住者に向けての宣伝には初期のものよりは若干現実をふまえつつも、仕事をすれば金の入る国だとの勧誘には変わりなかった。このため移住者達の目的は、相変わらず3年程度しっかり働いて帰国することであった。

この期に入植され、本論に登場してもらったのが、

- ・昭和7（1932）年に出航された井上克氏。
- ・昭和8（1933）年に出航された森村さんの妻孝子さんの両親。
- ・昭和9（1934）年に出航されたハルとナツの高倉家である（NHKドラマ・参考までに）。

ところが、この期の最後は、第二次世界大戦の開始であり、しかも敵国民となってしまったことによる。その結果は、日本人の集会禁止から日本語の使用まで禁止するという惨めな状態での生活を余儀なくされた。

その上、戦後も負け組と勝ち組に分かれ、移住者同志での争いが永く続いた。終戦から数年たち情報も多くなり負けたとわかって、負けるはずはない神の国日本というトラウマから開放されるのは、戦後移民の再開により新しい入植者を迎えるまで残っていたという。

C. 戦後の移民

第二次世界大戦終了後、東南アジア・中国・満州・朝鮮など主としてアジア諸国から多くの引揚者が帰国してきた。しかし、疲弊していた経済状況下で働くすべもない人々が多かった上に、狭い国内では彼等を受け入れるだけの土地の余力も無かった。このため、戦後ただちに人口処理に対する問題が生じたが、その解決策の一つは再度の移民であった。

そのため開始されたのが、中米地域への移民であったが、国策に乗ってドミニカやハイチなどへと入植した人々にはその後の国の支援も無く結果的には棄民されたとして、現在も問題となっている。

南米へは、戦前から移住していた縁があるとはいえ、最多のブラジルでは大戦後も負け組、勝ち組と分かれるなどの混乱がまだ残っている状況下なのに移民が再開され、昭和28（1953）年第一船「さんとす丸」が到着した。

その後も続々と移民船が入港してきた。ピークとなった1959年には7041名が入植した。初期移住者との大きな違いは、彼等の目標は出稼ぎではなく、家族移民としての入植であった。この期の移民の後期にかけては、戦後の教育を受け、高学歴を持った青年達の中から新天地を目指したいという者も現われている。

本論で登場してもらったうちジャワ島からの引揚者で、初期に入植された堀千城氏はまさに前者の代表例であり、日本大学法学部を卒業すると同時に入植された森村吉蔵氏は後者の例であった。

最終的には、昭和48（1973）年3月27日サントス着の「にっぽん丸」まで続き、戦後の20年間で約5万人が入植して終了した。その理由は、昭和30年代から日本経済の回復が速くそのために

国内で労働者が必要になってき、収入も増してきたためである。一口で言えば、貧乏国日本から抜け出せ、豊かな国となってきたからである。

D. 逆移民－日本への出稼ぎから定住へ

昭和40（1965）年頃から、日本経済は急速に回復した。さらに1970年代後半から80年代にかけて高度経済成長期を迎える。その結果、これまでの状況とは一変して労働者が不足する状態になった。

そこで外国からも出稼ぎの労働者を導入せねばならない状況に至った。その頃ブラジルでは、ハイパーインフレに陥り、経済は危機的状況に直面し失業者が増加していた。

そこで、日本では外国人労働者を受け入れるに当って、取りあえず言葉に問題が無く日本での生活や社会にもなじみやすいことから、昭和60（1985）年に入管法を改正し、日系2世を優先して受け入れることにした。さらに昭和64（1989）年には、日系3世とその配偶者まで就労ができるように再改正した。この結果、毎年多くの出稼ぎ者が母国日本へ訪れた。彼等の居住地は、彼等を必要とした企業が集中したところであり、静岡（浜松）・群馬・愛知・神奈川各県などに集中している。

1985年以降、日本へやってきた出稼ぎ者はすでに32万人に達した。その数は、明治以降日本からブラジルへと移住した約19万人をはるかに越えてしまった。しかも、出稼ぎ目的で日本へきた人達も10年、20年と経過してくると、子供が生まれ、その子供達が育ち、日本語しかできない世代が生じてくると定住者が現われだしたが、その数もさらに多くなってきた。

この状況は、初期にブラジルへと向った日本からの移住者（移民）達がたどった過程と、まったく同様であり、まさに「逆移民」の状態である。

この頃からブラジル側では、あまりにも多くの若者たちが日本へ出稼ぎに出たため、日系社会自体が変質したとも言われている。例えば、ブラ拓の中心地域であるバストスBASTOS市でも、各家族の中から出稼ぎへ誰かが出ているという状態で、それも各家庭を支える中心者が出ている場合が多く産業も空洞化しているという。2008年挙行された「移民100年記念式典」でさえ行事を支える青壮年層が少なくなっており対応できるのだろうか危ぶまれたほどであった。

本論に登場してもらった堀家でも1992年から93年にかけて父が千葉県の工事現場で、母も神奈川県小田原市の介護施設で出稼ぎを経験され、帰国されている。現在も、末娘のジュリアナさんが愛知県で出稼ぎ中である。

森村家でも次女のリタさんが一時東京で出稼ぎを経験し帰国している。現在も3女のレニタさんは、東京で出稼ぎ中である。

ところが、近年、ブラジルも春めいてきた。元々天然資源、農業資源大国（鉄鉱石、ボーキサイト、マンガンの埋蔵量やコーヒーの他大豆、サトウキビ、バナナなどは世界第1位・2位）であり、それらを生かせずにいたが、他の世界・外国の方から、それらの資源に目を付けられてきた。同様の資源を持ちこれから開発されてくると予測される国の群の国名の頭文字を連ねたBRICs（ブラジル、ロシア、インド、中国の頭文字）の中でもその先進国としてダッシュしだしてき、これまでは、眠れる大国と称されてきたブラジルもやっと目を覚まし出したと思われるよ

うになってきていた。

さらに2004年にはファベラ出身のルラ大統領が出現し、貧しい多くの国民にやる気をおおっている。2007年には再選されている。

ところが、2008年秋のリーマンブラザースの破綻に発した世界経済の不況の波を受け、経済外交も停滞している。特に日本ではその影響をもろに受け、輸出産業を支えていた労働者をカットせねば企業自体が破綻する状態に追い込まれ、多くの出稼ぎ労働者を解職させることになった。

その結果、定着しだしていた家族までも退職し、帰国せざるを得ない状況が生じている。

では、今後はどう展開していくのだろうか？。

いずれ世界経済が回復してくるに従い、資源大国いったんBRICsの先頭国として目覚めた時の状況を思い出すだろう。

日本の企業がかぶった不況の大波や戦争さらに異常気象などの影響も、改めて近代史をながめて見れば、過去何度も発生しその都度乗り越えてきたではないか。現在の日本でも、ブラジルでも、頑張ってきた人達はその経験をふまえてきたのである。

本論で登場してもらったそれぞれの「家族史」そのものが、それを教え示してくれている。そのことを記し記録として残すのが、本論の大きな目的でもあったのである。

〔Ⅳ〕 移住者各人・各家庭の個性・特徴

植木ミエさんの場合

母方の祖祖父に当たる次男の長久氏と妻のツタエさんとが、初期の移民として大正2（1913）年に5年間の出稼ぎを目標に熊本県玉名郡からブラジルのコーヒー園へと出発した。ところがその5年目に長久氏がマラリアで死亡。その時祖父のパウロ氏は2才であった。仕方なくツタエさんは再婚する。

このためパウロ氏は苦勞して育つ。1930年20才でヨシエさんと結婚、子供ができる。5年後に独立するが、コーヒーの価格が暴落、あきらめ、野菜市場の仕事へ転職。子供達が成長、それぞれに職に就く。そのうち娘さん達とミシン洋裁を家内工業として始めたのがうまくいく。

一方、父方の祖父、堀千城氏は戦前ジャワ島でゴム園の支配人をしてしたが、敗戦で引き揚げる。戦後の移民が始まると迷わず、コチア青年農業組合の招聘に応募し、契約移民として熊本市から1955年にスタート、この時、父の計介氏は工業高校を出たばかりの17才であった。最初パウルー市のコーヒーと養蚕園で散々苦勞し、借金がかさみ転出。イタリア人経営の農園に移りやっとな息づく。4人の子供達が育ち、それぞれに職に就き家計を支え恵まれます。長男の父は、カンピーナス市の東山農場で野菜を歩合制で作る。その後農園を購入、さらに拡大する。

父は入植10年後の1965年に、日系2世のジョアンナ正子さんと結婚。1966年にミエさんが誕生。その後4人の子供達が育つ。長女のミエさんは地元の大学の工学部で学び卒業する。その後JICAの研修生に応募、日本へ来る。実習を兼ね福岡県の会社に勤める。日本滞在中に、筆者が勤務する奈良大学の地理学科を卒業して教科書出版会社に勤めていた植本栄壮氏が、教室主催で筆者が引率した海外巡検に参加する。そこで現場で生きた地理を学ぶことの大切さを知り退職し、JICA

の「海外開発青年」の制度に応募、ブラジルへ向かうことになる。この間にミエさんと知り合い、筆者にも紹介してくれ、その後結婚する。

そして3年間のブラジル滞在を終え、植木氏の郷里広島市で職に就き現在（広島リビング新聞社取締役）に至る。子供も2人でき、小学生となり子育てにも手がかからなくなってきたので、ミエさんは広島県の「外国人総合相談窓口」で働き出す。今後も両国のために役立つよう夫婦で対応する人生を築いていきたいとのこと。

井上克氏の場合

漁村出身で5人兄弟の末の子で、好物のバナナがいつも食べられる国だぞとおだてられて小学校を5年生で中退し、13歳で長姉夫婦に連れられてのスタートであった。

入植地では、眼前に広がる原野を見て、大人たちは愕然とする中でも開墾の意欲を湧かし、先頭に立って働き出す少年であった。

そのうちに近くの川に沢山大きな魚がいるのを見て、郷里の漁村の隣家がカマボコ屋であったのを思い出し、カマボコを作って売り歩き、一稼ぎしてから農作業に出ていた。

伐採地に最初に植えた綿は失敗したが、そこから学び3年目には成功へ、4年目は大豊作、8年目には借金も全て返した。

12年目に2世のモモ子さんと結婚して独立し、ハッカを植えたが失敗。入植13年で農業の時代は終わったと見切り、雑貨店を経営、日用品や農機具等を扱い成功。さらに土木工事用のダイナマイトまであつかうころには、大成功者となる。

第2次大戦時を内陸部だったので何とかしのぎ、戦後はずっとカチカチの「勝ち組」だったとのこと。

入植24年目、36歳、子供は5人となり、郷里の老いた母のことを思い、子供達の教育のことをも考え、ちょうど高度成長期をむかえていた日本へと1956年8月に引き揚げた。

最初は土木関係の仕事をし、分譲住宅業から建築業へ。帰国時は11才であった長男の実氏も大学を卒業、父と一緒に働きだす。常々おおらかで明るい気性から「都はるみ」の大ファンになり、とうとう会社名も「都住建紳」にした。現在はお孫さんも一緒に働く。3代会社で長男実氏が社長の「会長」として勤め、91才で健在。

森村吉蔵氏の場合

昭和8年青森市で生まれ、第2次大戦中通学していた小学校も自宅も戦災で焼失する。高校時にテニス部で活躍、国体で広島大会へ県代表として出場。日本大学法学部でも軟式庭球部で活躍。卒業後、戦後育ちのインテリ青年として大陸への夢を抱き、昭和31（1956）年9月23才で、オランダ船でブラジルへ向う。

電気、水道はおろかトイレも風呂も、およそ文明的なものは何もないバナナ農園での作業とその拡大のため森林の伐採が毎日続く。友人からの手紙を頼りにとうとうたまたまなくなり、バナナ運搬の運転手に頼んでトラックに潜り込み脱出。

その後幸いにも日系の小学校へ勤務することができ、そこでテニスを思い出し手製のコートを

作り、給料から用具を購入、学生から周囲の人々をもまき込み、試合に出場するうちに優勝する。

その頃企業に転出、1962年27才の時日系2世の孝子さんと結婚。子供もできる。さらに経済が好況をむかえた1966年には日系大企業「伯国三井物産」の商社マンに転出。日本とブラジルは昼夜が逆、それに合わせて働かねばならず大変だったが、日本への出張もあり、郷里の両親とも会えた。しかし、その後ハイパーインフレに見舞われ、20年勤めて1986年に退職する。この間が絶頂期だったとのこと。その後は自営業へ。育った子供たちはそのうちに日本への出稼ぎも経験、現在も末娘が日本滞在中。

吉蔵氏は今なおテニスを楽しみ、寒い冬は毛布を持って練習コートや試合場へと出向く。奥さんは画家で、自宅兼アトリエで楽しみ、日曜には地域の先生としても活躍。現在は、次女とお孫さんと3世代同居、76才で健在である。

〔V〕人間（精神）と社会（世相）との側面から

人間の精神的側面から移民がたどった経過と現状をたどってみよう。出発時の個人や家族の強い「志」は、郷里に残された親や兄妹達のため3～5年間ほど出稼ぎをしてき、将来の幸せな生活の基礎を築くのが目標であった。

必要なのは大陸での厳しい農業に耐えるだけの健康な身体と、一緒に働く家族であった。当然並みの労働とは思ってはいず、しっかり頑張って働いて帰国すること。そのためには嫌なことにも我慢することを覚悟していた。

夢の国ブラジルにたどり着き、働き出すがすぐに金のなるコーヒーの木など無いことに気づかされる。それでも慣れてくればそのうちには何とかなるかとも思い、コーヒー・綿花・ハッカ・カイコ・バナナ・養鶏などで頑張る。確かに一部には成功する人も現われた。しかし、徐々にあきらめ農業の時代は終わったと判断し、転職する人たちが多くなる。現地で生まれ、育ちだしてきた子供たちも新しい時代の教育を受け、農業以外の職に就く。

つまり年月の経過は、農業労働者として出稼ぎからのスタートであったが、志は達成できず帰国の費用も無くそのうちに定着し、結果的には移民に至ったが、親達の苦労を見てきた2・3世は立派に育った。そして昨（2008）年は、最初の笠戸丸で移民して100年を迎えた。1世はすでに居なく、3、4世が活躍中で、6世が生まれたとのニュースが伝えられた。

一方、社会や時代背景の中で、移民達がたどった経過と現状をたどってみよう。その国の自然や社会が持つ環境、その時代の情勢や世相は、個人や家族ではどうにもならない。その中を翻弄されながらできるだけ上手に流れざるを得ない。

まず出発時の日本側では、過剰気味な人口に対応するだけの仕事の確保ができず、国力も乏しいため労働力を必要とする地域や大陸へと国民を押し出さねばならない状況であった。他方、受け入れるブラジル側では1888年の奴隷解放以来の労働力不足を補う役を果たしてくれるためにアジアからやってきた新たな労働者達に過ぎなかった。この両国間での思惑の相違に、移住者たちはただちに直面させられたのである。

そして第2次世界大戦、しかも敵国民となることなど考えても見なかつただろう。この大波で

は日本語教育もできなくなり、日本人達の集会も会話もできないことになった。そして敗戦となるが、今度は神国日本が負けるはずはない、勝ったはずだと日本人同士が「負け組」と「勝ち組」に分かれて争うことになった。日本の戦後経済の立ち上がりが早かったことを知ると勝った証拠だという始末、そのようなトラウマから完全に開放されるのは、戦後開始された移民達がやってきてからという。

その後、日本の経済は高度成長時代をむかえる。しかしその頃ブラジル側は逆にハイパーインフレに陥る。日本では労働力が不足し外国人を受け入れることにする。この時まず言葉も通じ社会にもなじみやすい日系人と、1985年以来出稼ぎ労働者として受け入れることにする。そして年月が経過してくると子供が生まれ、育ってくる頃には定着者が増加してきた。これは初期の日本人達がブラジルでたどった現象とそっくりであり「逆移民」の時代に至ったのである。

さらにその後、これまで長い間「眠れる資源大国」と称されてきていたブラジルに、諸外国が豊かな農産（コーヒー・トウモロコシ・サトウキビ・オレンジなど）・鉱産（鉄・ボーキサイト・マンガン・石油）資源に注目しだし、眠りを覚まさせようとした。すなわち、BRICsの先頭国に位置づけて資源外交を始めだした。

ブラジル側ではファベラ出身のルラ大統領が出現、2期目も当選し、若者達や貧しい多くの国民に自分を見習え、日本人達がしっかりと子供たちを教育し、現在立派にブラジルのため活躍している姿から学べと発破をかけている。

ところが昨2008年9月USA発のリーマンブラザーズ破綻に発した経済不況の流れが、またもや世界中を駆けめぐり出した。特に日本の産業界は大波をかぶった。このため、日本へ出稼ぎに来ていた人達の多くが職場をカットされ帰国を余儀なくされた人達も出た。

そして1年が経過した。幸いにも、ブラジル側の波はあまり大きくなく、その影響は軽かったようで、むしろいったん目覚め出していた国の将来は明るいようである。

この10月には次々回のオリンピック会場国が決定されるが、その上位候補国に入っていること自体世界が注目していることを示しており、さらにリオデジャネイロからサンパウロまで約500kmの鉄道新幹線敷設の入札も10月に決定する。この入札には日本も力を入れているが、ともあれ、このような大事業を発注できるだけの国力を持っている国であることに注目すべきであろう。

〔VI〕 さいごに

明治時代から現在に至る「ブラジルへの移民について、筆者が身近に付き合ってもらっている家族の協力を得て貴重な体験であるファミリーヒストリを提供してもらい各家の出稼ぎや移民へのきっかけから移民としての苦勞とその後の展開、そして現状までをたどってもらった。

それをもとに、わが国の移民とはどのようなものであり何だったのか。さらに、移民当事者や家族にとっては、その実態を通して見た結果としてどのようなものであり何だったのかを教えてください。その結果から、筆者なりの移民について考察を深めることができた。

筆者とは身近なごく親しい人達とはいえ、個人や家族の情報を研究のために提供していただい

た関係者に改めて深謝いたします。できることなら本論を土台に、さらに立派な各家のファミリーヒストリを書いてもらえる機会としていただければ幸いです。

注

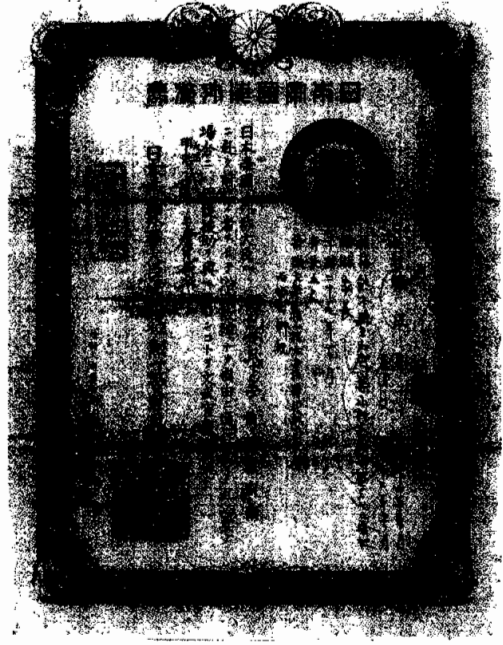
- 佐藤常蔵（1961）ブラジル風物記、帝国書院
二宮正人・編（1995）日系コミュニティの将来、ブラジル日本文化協会
移民研究会・編（1997）戦争と日本人移民、東洋書林
村野英一（2004）南米の日系パワー、明石書店
吉田忠雄（2006）南米日系移民の軌跡、人間の科学社
黒田公男（1995）日伯修好100年—ブラジルへの虹—、財団法人日伯協会
中村輝志（2009）移民、神戸移住センター移民資料室
日伯協会機関誌（2008・2009）ブラジル、No.938～945
ブラジル日本移民史料館編（2008）ブラジル日本移民の100年、風響社
池田碩（2004）USA内陸部における日系人社会の成立と解体および現状、奈良大学総合研究所所報No12
池田碩（2008）移民100周年式典にわいたブラジル、地理No639、古今書院
池田碩（2009）ブラジル移民の軌跡—ハルとナツ届かなかった手紙（NHKドラマ）、『シネマ世界めぐり』所収、ナカニシヤ出版

追記

本論投稿後の10月2日に、2016年（次次期）のオリンピックは本命とされていたシカゴ・マドリッド・東京を凌いでブラジルのリオデジャネイロに決定した。

写真ページ 1. 植木 (三井・堀) 家族 (A-1)

①



①祖・祖父三井長久氏のパスポート

②祖父母 堀千城・アヤカさん(右端)と子供達
渡航中の「アメリカ丸」船内で

③農作業中の父・長男の計介氏と
3男の絃一氏



写真ページ 2. 植木栄荘・ミエ家族 (A-2)



①

ブラジルへの日本人移民
100年式典行事へ参加

①笠戸丸が出航した神戸会場
2008. 4. 13

左：ブラジル総領事
中：兵庫県知事
右：神戸市長



②

②祖父・父が宿泊、ここから
スタートした。
「神戸移住センター」を訪問
5世の子供達にも説明する
植木家の家族。
家族で訪問する。



④

③神戸港の船出の碑
同じ碑がサントスにも建つ

④移住センターで移民船の乗
組員であった中村輝志氏
(中央) から話を聞く

③



写真ページ 4. 井上克・実家族 (B-2)

移民100年式典
神戸側のイベント開始

子どもの教育、共同体のこれから



日本初のブラジル移民船が神戸港を出発して28日
で九百年を迎えるのを記念し、約25万人が設立した神
戸市中央区山本通3、旧神戸移住センターで12日、
記念イベントが始まった。(井上克氏談)

神戸で記念イベント開幕

①

神戸新聞
2008. 4. 13

筆者と対話する克氏

現地での半生紹介、写真展も

「子どもの教育、共同体のこれから」
というテーマで、旧神戸移住センター
で4月12日、約25万人が設立した神
戸市中央区山本通3、旧神戸移住センター
で12日、記念イベントが始まった。
井上克氏と筆者が対話をした。克氏は
神戸新聞記者として、旧神戸移住センター
を訪ねた。井上克氏は、旧神戸移住センター
を訪ねた。井上克氏は、旧神戸移住センター
を訪ねた。



元ブラジル移民、井上克氏(右)の半生を紹介したコーナー＝旧神戸移住センター

「今、考える」

②



②毎年南米各地へ歌の慰問を続けておられる
歌手中平マリコさんとブラジルへの歌
「行け行け同胞海越えて……」をデュエット
する井上克氏 2007. 9. 24

③井上克・実氏のコーナーを訪問した
植木栄荘・ミエ(日系4世)さん 2008. 4. 13

④父(中央)・長男(左)・孫(右)と
3代そろって作業中：「都住建株」
2008. 11. 10

③



④



写真ページ 5. 森村吉蔵・孝子家族 (C-1)

①



②



①入植13年目36才で、
テニス大会男子複で初優勝 (1963)

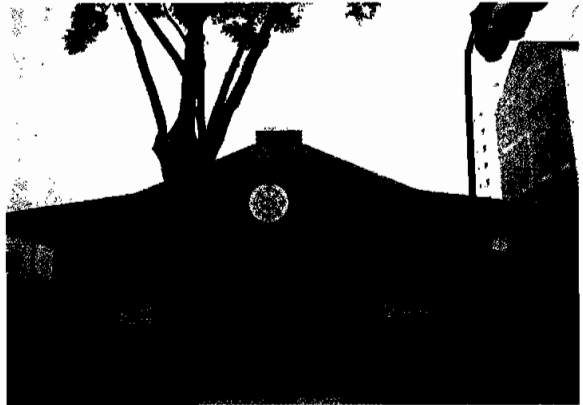
②当時のテニス仲間達 (1964)

③日伯「三井物産株」勤務時 (1965)
入植15年目の家族
多忙だったが絶頂期

④サンパウロ、禅宗の仏心寺

⑤奈良大学地理学科の巡検案内中 (2006)

④



③



⑤



写真ページ 6. 森村吉蔵・孝子家族 (C-2)

① 森村家の家庭訪問。森の中の雀も
家の中を通り抜けられることが
自慢の解放的な広い家

② 奥さんの孝子さんは画家
アトリエのベランダで

③ 夫妻と孫の竜ちゃんと筆者

④・⑤ 移民100周年記念式典
左・サンパウロ会場
2008年6月21日
右・ローランジア会場
2008年6月22日

①



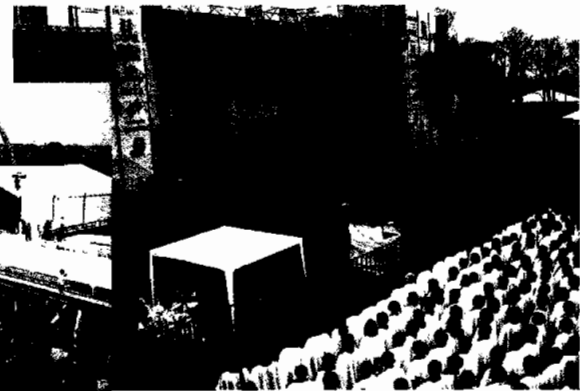
②



③



⑤



中央に皇太子・副大統領・州知事

④



Research on Japanese Who Immigrated to Brazil: An Historical Monograph of Japanese Immigrant Families

Hiroshi IKEDA

The year 2008 marked the 100th anniversary of the sailing of the ship Kasado-maru to Brazil from Kobe Port in April, 1908 carrying a group of 781 Japanese people to live and work in Brazil. They landed at the port of Santos and all met in San Paolo in June of 1908. Both cities celebrated the occasion last year, 2008, and this author participated in both events.

Immigration from Japan to Brazil began in 1908 and ended in 1973 with a total of some 250,000 Japanese people having immigrated there. Today, their descendants have reached the 5th generation. The Brazilians of Japanese descent in Brazil number some 1.5 million, the largest number of Japanese immigrants and their descendants anywhere in the world.

In 1985, Brazilians of Japanese descent started returning to Japan to work there. Their number has now reached around 320,000, some of whom stayed to live permanently in Japan. This has been called the "Reverse Immigration Phenomenon".

The author has gotten the cooperation of some very close immigrant friends in Brazil and has written up their family stories. In this paper, he tells why they went to Brazil in the first place, the troubles and struggles they had, and later developments up to the present.

Following this, the author studied Brazilians of Japanese descent living in Japan, who they are and what conditions they faced and face now in Japan. The people who cooperated with the author are very close friends, and author is very grateful for their cooperation in providing this personal information for my research.